

# 平安京右京四条三坊十一町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一三―一

平安京右京四条三坊十一町跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 平安京右京四条三坊十一町跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、住宅付工場建設工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

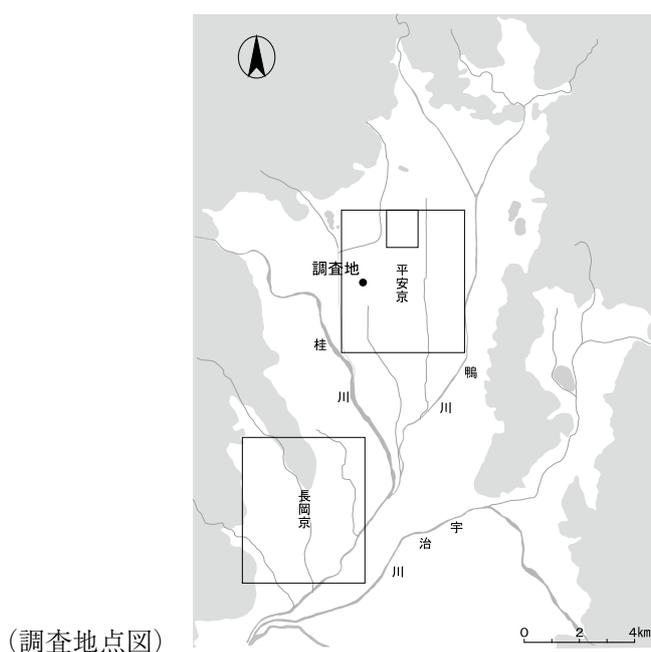
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年8月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 平安京右京四条三坊十一町跡（文化財保護課番号 12H429）             |
| 2 調査所在地  | 京都市右京区西院春栄町41-3、41-7の一部                    |
| 3 委 託 者  | 吉村株式会社 代表取締役 吉村 豊                          |
| 4 調査期間   | 2013年4月9日～2013年5月10日                       |
| 5 調査面積   | 316㎡                                       |
| 6 調査担当者  | 近藤奈央                                       |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山ノ内」を参考にし、作成した。   |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）             |
| 9 使用標高   | T.P：東京湾平均海面高度                              |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。          |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                       |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                        |
| 13 本書作成  | 近藤奈央                                       |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 周辺の調査	4
4. 遺 構	9
(1) 遺構の概要	9
(2) 基本層序	9
(3) 古墳時代以前の遺構	11
(4) 平安時代前期の遺構	13
(5) 平安時代中期以降の遺構	21
5. 遺 物	23
(1) 遺物の概要	23
(2) 土器類	23
6. ま と め	26

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	平安時代前期全景（西から）
		2	建物1全景（北から）
図版2	遺構	1	建物3、土坑121・122・124全景（北から）
		2	建物5全景（北東から）
		3	拡張区建物2・4全景（北から）
図版3	遺構	1	柵1全景（西から）
		2	柵2全景（西から）
		3	建物1柱穴155断面（東から）
		4	建物2柱穴191断面（南から）
		5	建物5柱穴163・建物2柱穴184断面（東から）
		6	土坑121断面（西から）
図版4	遺物		平安時代から室町時代の土器

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：300）	2
図3	調査前全景（北西から）	3
図4	作業風景（北東から）	3
図5	周辺の調査位置図（1：3,000）	5
図6	調査区西壁断面図（1：80）	10
図7	調査区南壁断面図（1：80）	11
図8	調査区平面図〔古墳時代以前〕（1：150）	12
図9	溝186実測図（1：40）	12
図10	調査区平面図〔平安時代前期〕（1：150）	13
図11-1	建物1実測図（1：80）	14
図11-2	建物1実測図土層名	15
図12	建物2実測図（1：80）	16
図13-1	建物3、土坑121・122・124実測図（1：80）	18
図13-2	建物3、土坑121・122・124実測図土層名	19
図14	建物4実測図（1：80）	19
図15	建物5実測図（1：80）	20
図16	柵1・柵2実測図（1：50）	20
図17	調査区平面図〔平安時代中期以降〕（1：150）	21
図18	溝100全景（東から）	22
図19	溝100断面（東から）	22
図20	溝100断面図（1：40）	22
図21	平安時代前期の土器実測図（1：4）	24
図22	中世の土器実測図（1：4）	25
図23	平安時代前期の遺構変遷図（1：250）	27

## 表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	6
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	23

# 平安京右京四条三坊十一町跡

## 1. 調査経過

調査地は、京都市右京区西院春栄町地内に位置する。平安京右京四条三坊十一町跡にあたり、『拾芥抄』西京図によれば、平安時代は小泉荘であったとされる。今回、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）によって試掘調査が行われた結果、平安時代の掘立柱建物跡が検出されたため、発掘調査を行うこととなった。

調査区は文化財保護課の指導に基づいて、敷地のほぼ中央部分に東西20m、南北15mの長方形に設定した。調査期間中に、調査区西端で南北方向の柱穴列を確認し、この柱穴列が西へ広がり建物跡になる可能性があるため、調査区北西角に、調査区西壁から西へ2.5m（南北幅3.5m）、同北壁から北へ2m（東西幅3.5m）の約16㎡を拡張して調査を行った。よって、調査面積は316㎡となった。



図1 調査位置図（1：2,500）

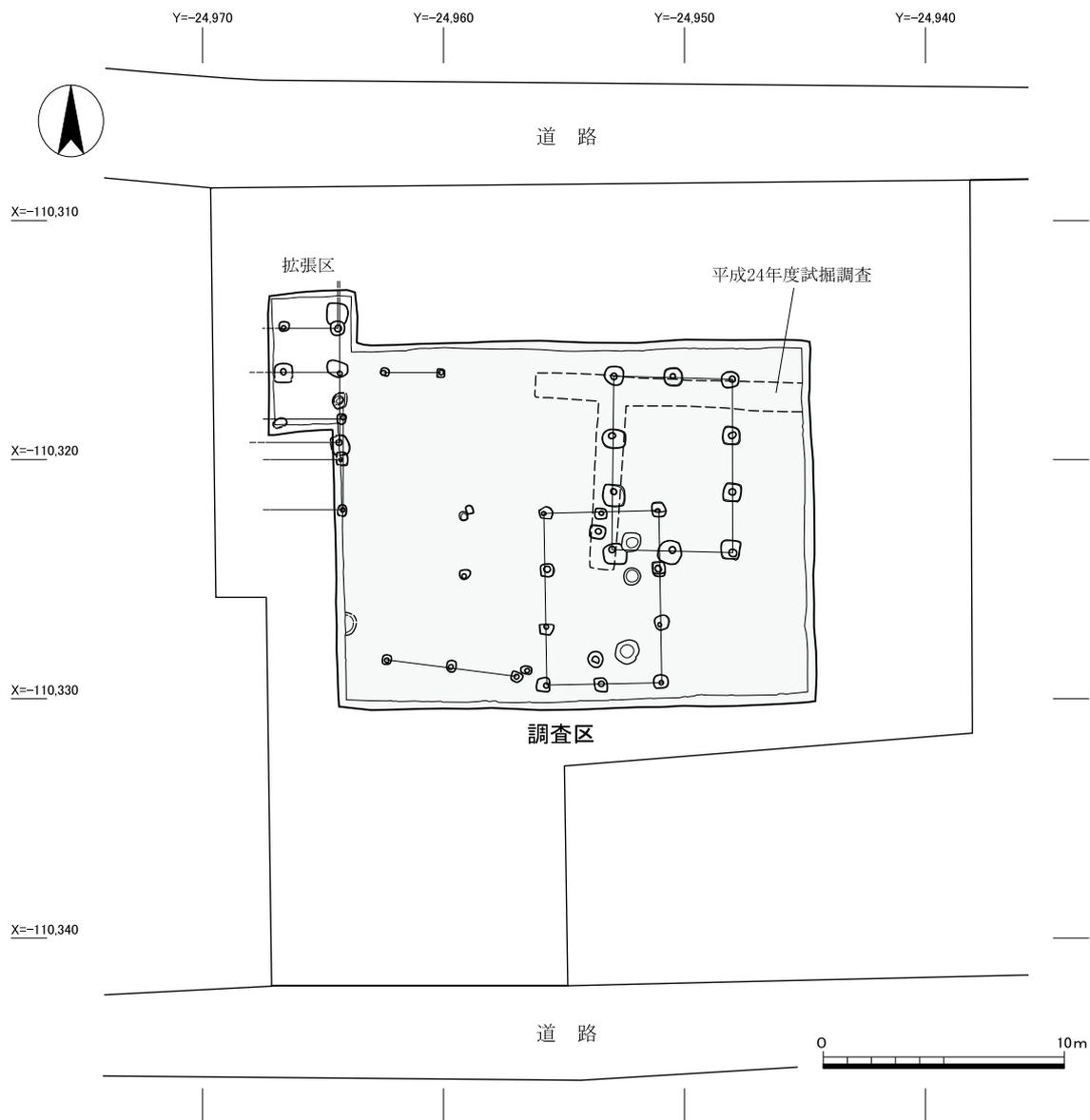


図2 調査区配置図（1：300）

調査は4月8日に調査区を設定し、文化財保護課の臨検を受け、翌9日から重機掘削を開始した。中世以降の耕作溝などを掘削した後、平安時代遺構面の調査を行った。平安時代前期の建物跡を良好に検出したため、4月27日には周辺住民を対象に現地公開を行った。5月7日から埋め戻しを始め、同日、調査区北西隅に重機を使用して拡張区を設けた。その結果、南北柱穴列は建物跡2棟分に相当することが判明し、さらに北および西へ遺構が展開していくことを確認した。5月10日には調査をすべて終了した。

## 2. 位置と環境

京都盆地の北西部に位置する今回の調査地は、付け替えられる前の紙屋川（現天神川）の扇状地に立地する。紙屋川は、平安京造営時に運河として、西堀川と呼ばれ平安京に取り込まれたが、平安時代中期頃には埋没した。しかし、流れが消えたわけではなく、その後は道祖大路（道祖川、平安時代前期以降）、野寺小路（野寺川、平安時代後期から鎌倉時代）へ流路を造り替えて維持された。室町時代以降から戦前までの旧流路は太子道から南西に向きを変え、御池通と佐井通の交差点付近を通り、三条通で西へ、そして西小路（恵止利小路）を南下していたとされる。この旧流路跡は現地図上でも確認でき、また河道の名残とみられる高まりが、三条通と西小路通交差点南東などで見ることができる。紙屋川上流から流出される土砂量は、平安時代から非常に多いことが近年の調査成果で判明しており、その堆積土が川底を上げ、周辺の地表よりも高くなる天井川の要因となった。昭和に入って、紙屋川の付け替え工事が計画されたが間に合わず、昭和10年（1935）の大雨の際には、大洪水を引き起こし、西ノ京円町から南西部一帯が水没する大きな被害をもたらした。現流路への付け替えは、昭和19年（1944）に竣工した。このように、調査区一帯は戦前まで紙屋川の下流域にあたり、その氾濫堆積物（砂礫層）の影響を受けていたと考えられる。現地表面高は28.7mである。

歴史的環境として、調査地北側には弥生時代から古墳時代の遺物散布地である西ノ京遺跡、同西側には弥生時代の集落跡である山ノ内遺跡が広がる。また、同南側は室町時代後期の西院小泉城跡の推定地となっている。

平安時代における調査地は、平安京右京四条三坊十一町跡の中央南東に位置する。鎌倉時代中期に成立したとされる『拾芥抄』西京図によれば、当地は「小泉荘」であった。この小泉荘は、右京四条二～四坊、同五条一～四坊、同六条二～四坊内に飛び地ではあるが、総計57町を占める広大な荘園であったという。範俊解案（東寺観智院文書）によると、承暦二年（1078）、曼荼羅寺（後の随心院）寺務の執行をめぐる、権律師義範と阿闍利伝燈大法師範俊との間に訴訟が起こっており、小泉荘の一部が曼荼羅寺寺務の管理下であったことがわかる。その後も、「西院小泉御庄」とう名称で宛行状や売券などに散見されるが、先の曼荼羅寺の「小泉荘」とこの「小泉御庄」、また



図3 調査前全景（北西から）



図4 作業風景（北東から）

後の摂関家・近衛家領の「小泉荘」とのつながりは不明とされている。室町時代後期の文献によれば、近衛家領西院庄と一乗院領西院庄があり、領有関係が錯綜していたという。江戸時代前期に京都所司代が検地を行ったところ、158箇所の所領に分かれており、さらに江戸時代中頃の史料では、宮家や公卿をはじめ多くの領主によって分割領有されていたという。「小泉荘」の実体解明は、洛中の近郊農村として発達した近世西院村が農地を確保していった過程を知る上で、また平安京内の荘園化を探る上でも重要な位置を占めるとみられるが、考古学的には未だに平安時代に比定できる関連遺構を検出できていないのが実状である。

### 3. 周辺の調査（図5、表1）

調査地周辺は、これまでに開発などに伴う埋蔵文化財調査は、いずれも試掘や立会調査という形では行われてきたが、発掘調査は実施されなかった。工事での掘削深が浅く、盛土のみの確認にとどまって遺構面や地山相当層まで深さが達していない例も多いが、周辺調査の成果をまとめておく。

山ノ内遺跡に係る遺構として、55・66地点で検出された弥生時代の土坑などがある。遺跡推定範囲内に入っていないが、46地点で古墳時代の溝が検出されており、西ノ京遺跡または山ノ内遺跡関連の遺構と考えられる。

平安時代の遺構は、6・10・17・46・66地点で検出された。その多くが溝であり、時期は平安時代前期が中心である。6・10地点では四条大路北側溝、17地点では宇多小路西築地内溝、46地点では四条坊門小路南側溝と推定される。その他に、7地点では平安時代後期の土坑、8地点では平安時代後期の包含層を確認している。8地点の3層分の路面は時期不明とされているが、周辺調査結果から平安時代前期から後期にかけての四条大路路面の可能性がある。

十三町にあたる59地点では、平安時代前期とみられる掘立柱建物跡が確認された。東西2間以上、南北5間以上の南北棟である。柱間は南北方向が3m等間、東西方向は2間分と考えられ5.7m、掘形は方形または長方形で、一辺は1～1.3mである。柱当りは直径約0.4mで、検出された柱穴の9基中、5基の柱穴に柱抜取痕跡が確認され、その中の1基については柱材とみられる木片が出土した。遺物は平安時代の瓦片が出土しているのみで、詳細な時期は不明とされているが、掘形埋土が今回検出した平安時代前期の柱穴と似た特徴を示していることから、同時期と考えられる。ただし、建物の方角が北で東へ大きく振れている点は、別時期の可能性も考慮すべきであろう。

鎌倉時代の遺構には10地点で土坑が検出され、鎌倉時代から室町時代の溝が57地点で確認された。その他に、鎌倉時代から室町時代の遺物包含層が広範囲にわたって確認されている。10・46地点では鎌倉時代の包含層、19・29・45・57・64地点では室町時代の包含層、46地点では室町時代後期の包含層を検出し、いずれも地表面下0.6～1.2mの間であった。これらの包含層は、今回の調査で確認した中世の耕作土の検出標高とほぼ同じ値を示していることから、中世の耕作土と考えることができる。また、時期不明とされている包含層についても、標高値や遺物が細片であること

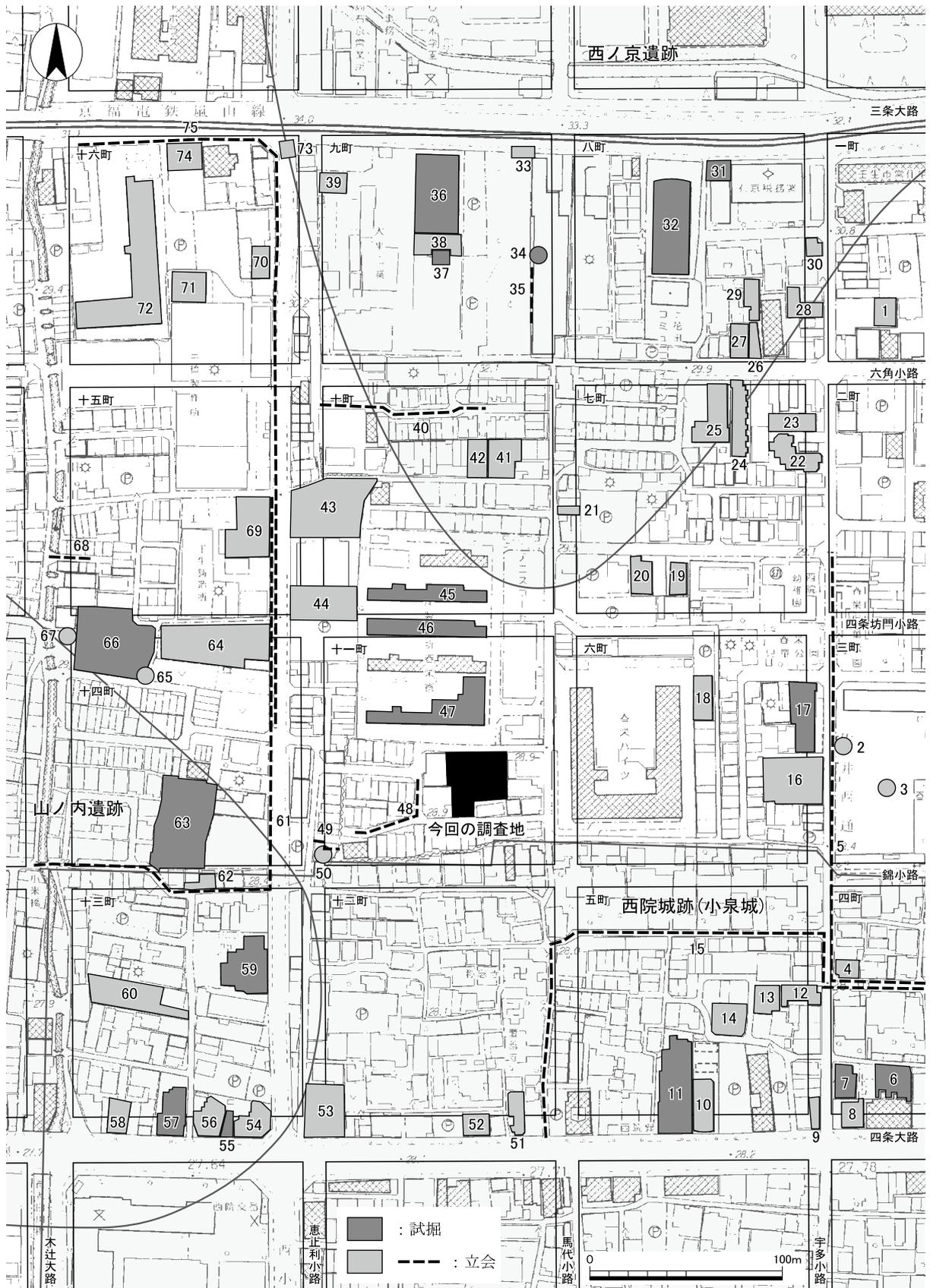


図5 周辺の調査位置図 (1 : 3,000)

表1 周辺の調査一覧表

番号	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
1	一町	立会	市埋文	S60	—	—	85HR174。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年
2	三町	立会	市埋文	H18	—	—	06HR220。GL-0.25mまで盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』2007年
3	三町	立会	市埋文	H12	—	—	00HR135。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』2001年
4	四町、西院城跡	立会	市埋文	H8	—	—	96HR382。GL-0.65mまで盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』1997年
5	三・四町、西院城跡	立会	市埋文	H23	時期不明の落込み (GL-0.65m)	—	11HR110。時期不明の落込みは宇多小路東側溝推定地に位置する。	『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成24年度』2013年
6	四町、西院城跡	試掘	センター	H11	平安の溝	—	No.34。四条大路北側溝とみられる東西溝を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』2000年
7	四町、西院城跡	試掘	市埋文	H1	平安後期の土坑 (GL-1.21m)	平安後期の土器	89HR073。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』1990年
8	四町、四条大路、西院城跡	立会	市埋文	H11	時期不明の路面3層分 (GL-1.65m)、平安前期の包含層 (GL-1.35m)、平安後期の包含層 (GL-1.26m)	平安前期・後期の土器	99HR416。GL-1.55mで地山。検出した路面は平安前期～後期の路面とみられる。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』2001年
9	宇多小路、西院城跡	立会	市埋文	S62	時期不明の湿地状堆積 (GL-0.67m以下)	—	87HR002。GL-1.4mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年
10	五町、四条大路、西院城跡	立会	市埋文	H4	平安前期の溝・土坑・包含層、鎌倉の土坑・包含層	平安前期・鎌倉の土器	92HR095。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』1993年
11	五町、四条大路、西院城跡	試掘	市埋文	H1	江戸の南北濠 (GL-1.2m)	江戸の土器	89HR010。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』1990年
12	五町、西院城跡	立会	市埋文	H6	—	—	94HR029。GL-1.2mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』1995年
13	五町、西院城跡	立会	市埋文	H18	—	—	06HR389。GL-0.35mまで盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』2007年
14	五町、西院城跡	立会	市埋文	H18	—	—	06HR308。GL-0.5mまで盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』2007年
15	四・五・十二町、西院城跡	立会	市埋文	H23	—	—	11HR238。GL-0.5～0.9mで地山。	『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成24年度』2013年
16	六町、宇多小路	立会	市埋文	H19	時期不明の湿地状堆積 (GL-0.9m)	—	07HR132。GL-0.8～1.42mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』2008年
17	六町、宇多小路	試掘	市埋文	S60	平安の溝、時期不明の溝 (GL-0.85m)	平安の土器	85HR209。宇多小路西側溝内溝とみられる南北溝を検出。GL-1mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』1987年
18	六町	立会	市埋文	H5	平安時代の包含層 (GL-0.33m)	—	93HR211。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』1994年
19	七町	立会	市埋文	S60	室町の包含層 (GL-0.71m)、時期不明の溝 (GL-0.85m)・落込み	室町の土器	85HR205。室町より古い時代の北西～南東方向の溝を確認。GL-0.8mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』1987年
20	七町	立会	市埋文	S63	時期不明の土坑 (GL-1.12m)	時期不明の土器	88HR148。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』1990年
21	七町、馬代小路、西ノ京遺跡	立会	市埋文	S60	—	—	85HR170。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年
22	七町、宇多小路	立会	市埋文	S62	時期不明の落込み	—	87HR113。GL-0.6mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年
23	七町、宇多小路	立会	市埋文	S57 H15	時期不明の路面 (GL-0.76m)	—	82HR032。宇多小路の路面か？ 03HR136。GL-1.36mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』1983年、 『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』2004年
24	七町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H5	時期不明の落込み (GL-0.83m)	—	93HR147。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』1994年
25	七町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H8	近世の包含層 (GL-0.35m以下)	近世の土器	96HR185。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』1997年
26	八町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	S56	—	—	81HR115。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』1982年
27	八町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H2	時期不明の土坑 (GL-1.64m)	時期不明の土器	90HR016。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』1991年
28	八町、宇多小路、西ノ京遺跡	立会	市埋文	S60	時期不明の包含層 (GL-0.55m)	—	85HR158。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年
29	八町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H2	室町の包含層 (GL-0.64m)	室町の土器	90HR086。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』1991年
30	八町、宇多小路、西ノ京遺跡	立会	市埋文	S56	—	—	81HR127。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』1982年

番号	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
31	八町、西ノ京遺跡	試掘	センター	H10	時期不明の氾濫堆積(GL-1m以下)、同湿地状堆積(GL-2.2m以下)	—	No.37。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成10年度』1999年
32	八町、西ノ京遺跡	試掘	センター	H9	—	—	No.46。GL-2.8mで地山。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成9年度』1998年
33	九町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	S57	—	—	82HR134。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』1983年
34	九町、西ノ京遺跡	試掘	市埋文	S60	時期不明の南北溝(GL-0.85m)	—	85HR034。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年
35	九町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	S58	—	—	83HR060。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』1984年
36	九町、西ノ京遺跡	試掘	市埋文	H1	—	—	89HR102。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』1990年
37	九町、西ノ京遺跡	試掘	市埋文	S60	—	—	85HR073。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年
38	九町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H4	—	—	92HR092。	『京都市内遺跡立会調査概報平成4年度』1993年
39	九町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H21	時期不明の落込み(GL-1m)	—	09HR342。	『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成21年度』2010年
40	十町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H9	—	—	97HR212。GL-0.9mまで盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報平成9年度』1998年
41	十町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H2	—	—	90HR024。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』1991年
42	十町、西ノ京遺跡	立会	市埋文	H2	—	—	90HR050。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』1991年
43	十・十五町、恵止利小路	立会	市埋文	S62	—	—	87HR057。GL-1.5mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年
44	十・十五町、恵止利小路	立会	市埋文	H6	—	—	94HR508。GL-1.2mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報平成7年度』1996年
45	十町	試掘	市埋文	S63	室町の包含層(GL-1.15m)、時期不明の土坑	室町の土器	88HR010。GL-1.2mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』1989年
46	十一町、四条坊門小路	試掘	市埋文	S60	平安の溝(GL-1.18m)、古墳の溝(GL-1.23m)、室町後期の包含層(GL-0.96m)	古墳・平安前期(9世紀)・室町後期の土器	85HR018。四条坊門小路南側溝を検出。GL-1mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年
47	十一町	試掘立会	市保護課市埋文	H20 H21	—	—	No.55。 09HR023。GL-1.1mで地山。	『京都市内遺跡試掘調査報告平成20年度』2009年、 『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成21年度』2010年
48	十一町	立会	市埋文	S63	—	時期不明の土器	88HR014。GL-1.1mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』1989年
49	十一町	立会	市埋文	S63	—	—	88HR068。GL-0.6mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』1989年
50	十一町	立会	市埋文	S62	—	—	87HR204。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』1989年
51	十二町、四条大路、西院城跡	立会	市埋文	H11	時期不明の湿地状堆積(GL-1.1m以下)	—	99HR240。	『京都市内遺跡立会調査概報平成11年度』2000年
52	十二町、四条大路、西院城跡	立会	市埋文	S57	時期不明の池または流れ堆積(GL-0.64m)	時期不明の土器	82HR038。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』1983年
53	十二町、四条大路、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	H21	—	—	09HR357。GL-0.9mで地山。	『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成21年度』2010年
54	十三町、四条大路、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	H13	時期不明の湿地および流れ堆積(GL-1.3m以下)	—	01HR299。GL-1.5mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報平成13年度』2002年
55	十三町、四条大路、西院城跡、山ノ内遺跡	試掘	市埋文	S57	弥生の土坑・包含層(GL-1.6m)	弥生土器	82HR041。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』1983年
56	十三町、四条大路、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	H13	—	—	01HR300。GL-1.2mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報平成13年度』2002年
57	十三町、四条大路、西院城跡、山ノ内遺跡	試掘	市埋文	S58	鎌倉～室町の包含層・溝(GL-0.9m)	鎌倉～室町の土器	83HR027。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』1984年
58	十三町、四条大路、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	H23	時期不明の土坑2・落込み1	—	11HR164。GL-1.24mで地山。	『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成23年度』2012年

番号	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
59	十三町、西院城跡、山ノ内遺跡	試掘	センター	H6	平安の掘立柱建物1(2間以上×5間以上の南北棟)	—	平成6年度No.49。平成7年度No.4。GL-1.25mで遺構検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』1995年、 『同 平成7年度』1996年
60	十三町、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	H11	時期不明の包含層 (GL-0.84m)	時期不明の土器	89HR062。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』1990年
61	十三～十五町、錦小路、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	H9	江戸の包含層 (GL-1m以下)	江戸の土器	97HR500。GL-1.3mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』1999年
62	十三町、錦小路、西院城跡、山ノ内遺跡	立会	市埋文	S56	時期不明の包含層 (GL-1m)	—	81HR151。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』1982年
63	十四町、山ノ内遺跡	試掘立会	市保護課市埋文	H19 H20	—	—	No.11。GL-1.9mで地山。 08HR075。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』2009年、 『京都市内遺跡詳細分布遺跡報告 平成21年度』2010年
64	十四町、四条坊門小路	立会	市埋文	H8	鎌倉～室町の包含層 (GL-0.67m以下)	鎌倉～室町の土器	96HR005。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』1997年
65	十四町	立会	市埋文	H20	時期不明の包含層 (GL-0.9m)	時期不明の土器	08HR059。GL-1.06mで地山。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』2009年
66	十四町、四条坊門小路、山ノ内遺跡	試掘	市保護課	H19	弥生・平安・中世の遺構および整地層	—	No.60。GL-0.7m以下で遺構などを確認。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』2008年
67	四条坊門小路、木辻小路	立会	市埋文	H5	時期不明の包含層 (GL-0.5m)	—	93HR303。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』1994年
68	十五町、木辻小路	立会	市埋文	S59	時期不明の包含層 (GL-0.45m)	—	84HR039。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』1985年
69	十五町	立会	市埋文	S62	時期不明の湿地状堆積	—	87HR115。GL-1.6mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年
70	十六町	立会	市埋文	H19	—	—	07HR173。GL-1.21mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』2008年
71	十六町	立会	市埋文	S62	—	—	87HR029。GL-0.95mで地山。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年
72	十六町	立会	市埋文	S62	平安～室町の湿地状堆積 (GL-0.95m以下)	平安～室町の土器	87HR078。地山未検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年
73	十六町	立会	市埋文	S56	—	—	81HR023。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』1982年
74	十六町	立会	市埋文	H18	—	—	06HR291。GL-1.1mまで盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』2007年
75	十四～十六町	立会	市埋文	S62	—	—	87HR150。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988年

※ 遺跡名の「右京四条三坊」は省略した。

※ 調査機関の「市埋文」は財団法人京都市埋蔵文化財研究所、「センター」は京都市埋蔵文化財調査センター、「市保護課」は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課を指す。

※ 備考の記号は調査No.である。

から、同様に中世の耕作土とみられ、調査地一帯が中世に広く耕地化していたことを示す資料となろう。

中世環濠式城跡とされている西院城推定地の11地点では、江戸時代の南北方向の濠が確認された。16世紀中頃に築かれ、短期間に破却されたという西院城(小泉城)跡の時期には該当していないが、18世紀初頭に作られた『山城名勝志』には、堀の一部が残っていたと記されていることから、西院城の遺構である可能性もある。

また、各地点で検出した時期不明の湿地状堆積や落込みは、地表下0.6～1.3mの間に収まっており、中世から近世の水田跡の可能性が考えられる。

## 4. 遺 構

### (1) 遺構の概要 (表2)

調査区東半および拡張区で、平安時代前期の建物跡や柵などを検出した。柱穴や土坑が重複していることから、2時期を想定することができた。調査区南半では、鎌倉時代の東西方向の溝を確認した。この溝の下層では、平安時代中期から鎌倉時代頃の湿地状堆積が認められ、さらに下層で数条の溝を検出した。溝の方位は東西、南北が主体であるが、方位の異なる溝を2箇所を確認した。一つは、調査区南西で検出した北西から南東方向の溝で、もう一つは埋土は異なるが調査区北東で同じ方向の溝を確認している。湿地状堆積およびこれらの溝からは時期の判別できる遺物は出土していないが、層序から時期を決めた。また、調査区全面にわたって、室町時代の耕作溝が縦横に掘られており、これら関連の施設を構成していたとみられる柱穴や杭跡なども検出した。また、調査区北西角から拡張区にかけて、L字に緩やかに曲がる溝を検出しており、弥生時代から古墳時代の西ノ京・山ノ内遺跡関連の遺構とみられる。

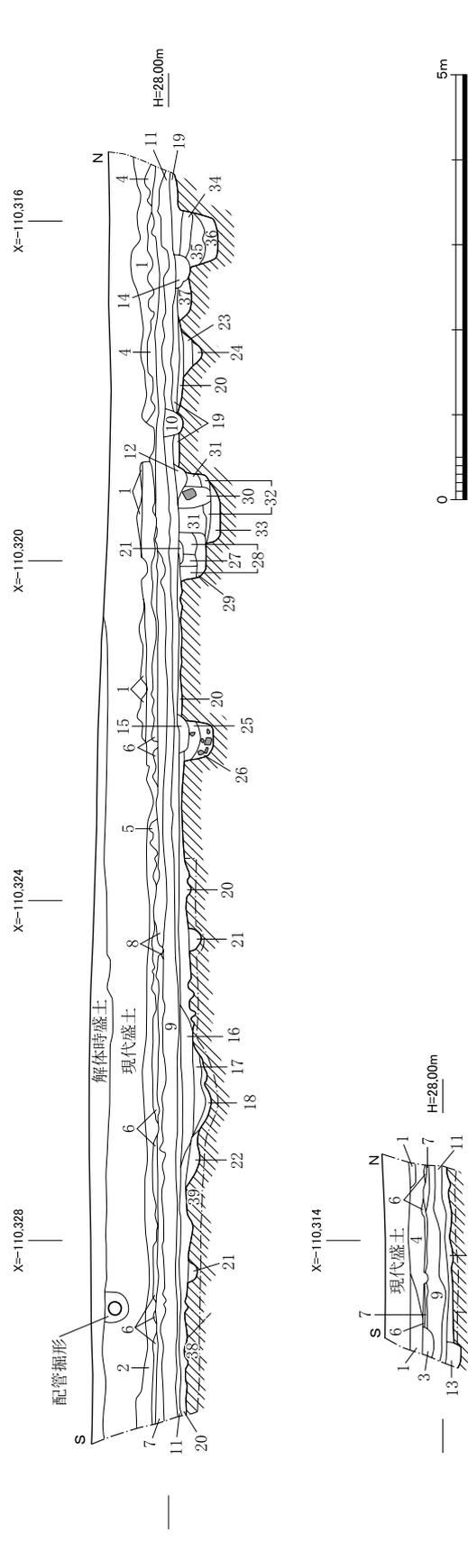
なお、調査区中央から西半では、地山相当層中に北東から北西、東から西方向へ黒色土が帯状に確認できる部分があり、古墳時代以前の遺構の可能性があったため、一部を断ち割って下層の確認を行った。しかし、遺物は出土せず、また断面観察からは自然流路の堆積と判断したため、全掘削はしていない。

### (2) 基本層序 (図6・7)

調査区西壁 X = -110,320 付近の基本層序 (図6) は、現地表面から0.35 mまでが現代盛土、0.5 mまでが現代耕土 (第1・2層)、0.55 mまでが近世から近代耕土 (第4層)、0.66 mまでが近世耕土 (第6・8層)、0.82 mまでが中世耕土 (第9・11層)、0.86 mまでが平安時代中期から鎌倉時代の湿地状堆積 (第20層)、その直下に地山相当層 (第39層) である。各時代の耕土には第10・12層などの耕作溝が伴う。鎌倉時代の溝100は、中世耕土の第11層直下で検出し、第20層を切り込

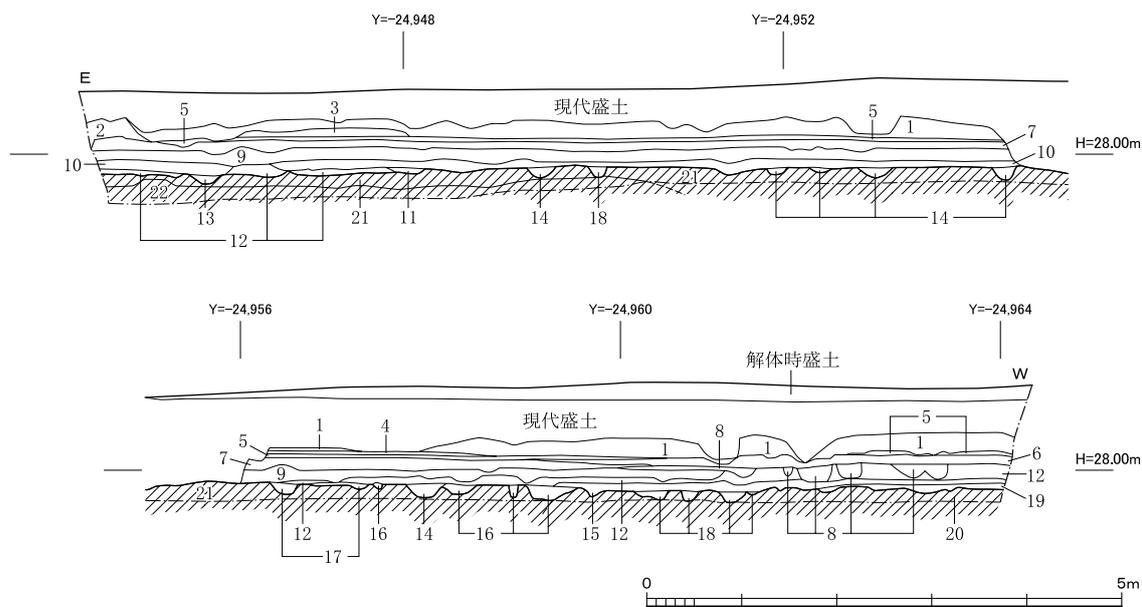
表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代以前	溝186	
平安時代前期	建物1～5、柵1・2、土坑121・122・124、柱穴	建物1・2が古く、建物3～5が少し新しい。土坑3基は建物3に伴う。
平安時代中期 ～鎌倉時代	溝 (溝100など)	溝100は区画溝の可能性はある。
室町時代	耕作溝 (溝40など)、柱穴 (柱穴73など)、杭跡	
江戸時代	杭跡	



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質土(現代耕土)</p> <p>2 5Y5/1 灰色粘質土、φ0.5~1cmの礫少量含(現代耕土)</p> <p>3 2.5Y4/1 黄灰色シルト、φ0.5~1cmの礫・炭少量含(現代耕作溝)</p> <p>4 2.5Y4/2 灰黄褐色シルト、上面に鉄分沈着(近世から近代耕土)</p> <p>5 10YR4/4 にぶい黄褐色砂質土、φ1cmの炭少量含、上面に鉄分沈着</p> <p>6 5Y5/3 灰オリーブ色シルト(近世耕土)</p> <p>7 5Y4/3 暗オリーブ色粘質土、鉄分沈着(近世耕土)</p> <p>8 5Y5/2 灰オリーブ色シルト、φ1~2cmの礫少量・φ1~2cmの土師器少量含、上面及びφ1~2cm粒で全面に鉄分沈着(近世耕土)</p> <p>9 10YR3/3 暗褐色粘質土、φ0.5~3cmの礫・φ1~5cmの土師器含(中世耕土)</p> <p>10 5Y4/3 暗オリーブ粘質土混10YR3/3 暗褐色粘質土(中世耕作溝)</p> <p>11 10YR4/4 褐色粘質土、φ1~2cmの礫少量含、鉄分沈着(中世耕土)</p> <p>12 10YR3/3 暗褐色粘質土混2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土、φ1~4cmの礫含(中世耕作溝)</p> <p>13 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、φ0.5~1cmの炭・土師器少量含(中世耕作溝)</p> <p>14 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土、粘性あり、φ0.5cmの土師器少量含(中世耕作溝)</p> <p>15 10YR3/3 暗褐色粘質土混10YR3/1 黒褐色粘質土(中世耕作溝)</p> <p>16 7.5YR2/2 黒褐色粘質土、φ0.5~1cmの礫少量含(溝100)</p> <p>17 10YR3/2 黒褐色粘質土、φ1~2cmの礫・φ1cmの土師器少量含(溝100)</p> <p>18 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、φ0.5~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土プロック少量含(溝100)</p> <p>19 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土、φ1~2cmの礫・土師器少量含、鉄分沈着</p> <p>20 10YR3/1 黒褐色粘質土(平安時代中期から鎌倉時代の湿地状堆積)</p> | <p>21 10YR3/1 黒褐色粘質土(平安時代中期から鎌倉時代の耕作溝?)</p> <p>22 10YR3/3 暗褐色粘質土、φ0.5cmの10YR2/1 黒色粘質土・φ0.5~2cmの10YR5/6 黄褐色粘質土プロック少量含</p> <p>23 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ1~2cmの礫少量含</p> <p>24 7.5YR3/2 黒褐色粘質土、φ10cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土プロック少量含(柱穴164)</p> <p>25 10YR2/1 黒色粘質土、φ0.5~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土プロック少量、φ0.5~1cm炭少量含(柱穴164)</p> <p>26 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混10YR5/2 灰黄褐色粘質土、φ5~10cmの礫・φ0.5~1cm炭少量含(柱穴163)</p> <p>27 10YR3/2 黒褐色粘質土、φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土プロック少量、φ0.5cm炭少量含(柱穴163)</p> <p>28 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土・10YR2/1 黒色粘質土プロック少量含(柱穴163)</p> <p>29 10YR6/6 明黄褐色粘質土、φ1~2cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土・10YR2/1 黒色粘質土プロック少量含(柱穴163)</p> <p>30 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR6/1 褐灰色粘質土、φ0.5cm以下の10YR6/6 明黄褐色粘質土粒少量含(柱穴184柱当り)</p> <p>31 10YR6/6 明黄褐色粘質土、φ1~10cmの10YR3/2 黒褐色粘質土・10YR6/1 褐灰色粘質土プロック多量含(柱穴184)</p> <p>32 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土、いずれもφ5~8cmのプロック(柱穴184)</p> <p>33 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土少量含(柱穴184)</p> <p>34 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土・φ0.5~1cmの10YR5/6 黄褐色粘質土プロック、φ1~2cmの礫少量含(柱穴139)</p> <p>35 10YR5/2 灰黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土、φ1~2cmの10YR2/1 黒色粘質土プロック、φ1~2cmの礫少量含(柱穴139)</p> <p>36 10YR3/2 黒褐色粘質土、φ1~5cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土プロック少量含(柱穴139)</p> <p>37 10YR1.7/1 黒色粘土、φ2~5cmの礫少量含(溝186)</p> <p>38 2.5Y5/3 黄褐色粘質土(地山相当層)</p> <p>39 10YR6/6 明黄褐色粘質土(地山相当層)</p> |
|---|---|

図6 調査区西壁断面図 (1:80)



- 1 5Y5/1 灰色粘質土、 $\phi$  0.5~1cmの礫少量含 (現代耕土)
- 2 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘質土シルト質、 $\phi$  0.5~1cmの炭含
- 3 5Y4/1 灰色粘質土、 $\phi$  1~2cmの炭少量含
- 4 7.5Y4/1 灰色シルト、 $\phi$  1~2cmの炭・貝・木片少量含 (近世から近代耕土)
- 5 5Y5/3 灰オリーブ色シルト (近世耕土)
- 6 5Y4/3 暗オリーブ色粘質土、鉄分沈着 (近世耕土)
- 7 2.5Y5/3 黄褐色粘質土、 $\phi$  0.5~2cmの礫・土師器少量含、 $\phi$  0.5cm以下の鉄分粒全面に沈着 (近世耕土)
- 8 5Y4/1 灰色砂質土、 $\phi$  0.5~1cmの礫・土師器少量含 (近世耕作溝)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (中世耕土)
- 10 2.5YR5/2 暗灰黄色粘質土、 $\phi$  1~2cmの礫・土師器少量含 (中世耕土)
- 11 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (中世耕作溝)
- 12 10YR3/3 暗褐色粘質土、 $\phi$  0.5~3cmの礫・ $\phi$  1~5cmの土師器含 (中世耕土)
- 13 10YR4/4 褐色粘質土、 $\phi$  1~2cmの礫少量含 (中世耕作溝)
- 14 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、粘性あり、 $\phi$  0.5cmの土師器少量含 (中世耕作溝)
- 15 10YR4/4 褐色粘質土、 $\phi$  1~2cmの礫少量含、鉄分沈着 (中世耕土)
- 16 5Y4/1 灰色粘質土、 $\phi$  1~2cmの礫少量含 (中世耕作溝)
- 17 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土、 $\phi$  1cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック少量含 (中世耕作溝)
- 18 2.5Y4/1 黄褐色粘質土、 $\phi$  1~3cmの2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック少量含 (中世耕作溝)
- 19 10YR3/1 黒褐色粘質土 (平安時代中期から鎌倉時代の湿地状堆積)
- 20 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 (地山相当層)
- 21 10YR5/6 黄褐色粘質土~粘土 (地山相当層)
- 22 10YR5/6 黄褐色粘質土~粘土、 $\phi$  2~15cmの礫多量含 (地山相当層)

図7 調査区南壁断面図 (1:80)

んで造られていた。平安時代前期の柱穴は第11・20層を除去した段階で検出し、柱穴163(第27~28層)と柱穴184(第30~33層)の切り合い関係を確認できた。なお、調査区南東一帯の地山相当層は径2~15cmの礫を多量に含む黄褐色粘質土~粘土層であるが、礫を含まない西壁の地山相当層より先に堆積した土であることを確認している。なお、建物解体時の盛土は現代盛土上に約0.1mの厚さで調査区南西隅付近にのみ確認し、現代盛土は解体された工場が建築された昭和30年代の盛土、現代耕作土は工場用地となる直前までの水田跡である。

調査は、中世耕作土直下の地山相当層の上面を平安時代の遺構面と認識して行った。そのため、中世の耕作溝は地山相当層上面で検出したもののみを対象にし、古墳時代以前の遺構についても平安時代の遺構を掘り下げた後、同じ面で調査を行った。

### (3) 古墳時代以前の遺構 (図8)

溝を1条確認した。

溝186(図9) 調査区北西隅から拡張区にかけての範囲で検出した。幅0.25~0.66m、深さ0.07

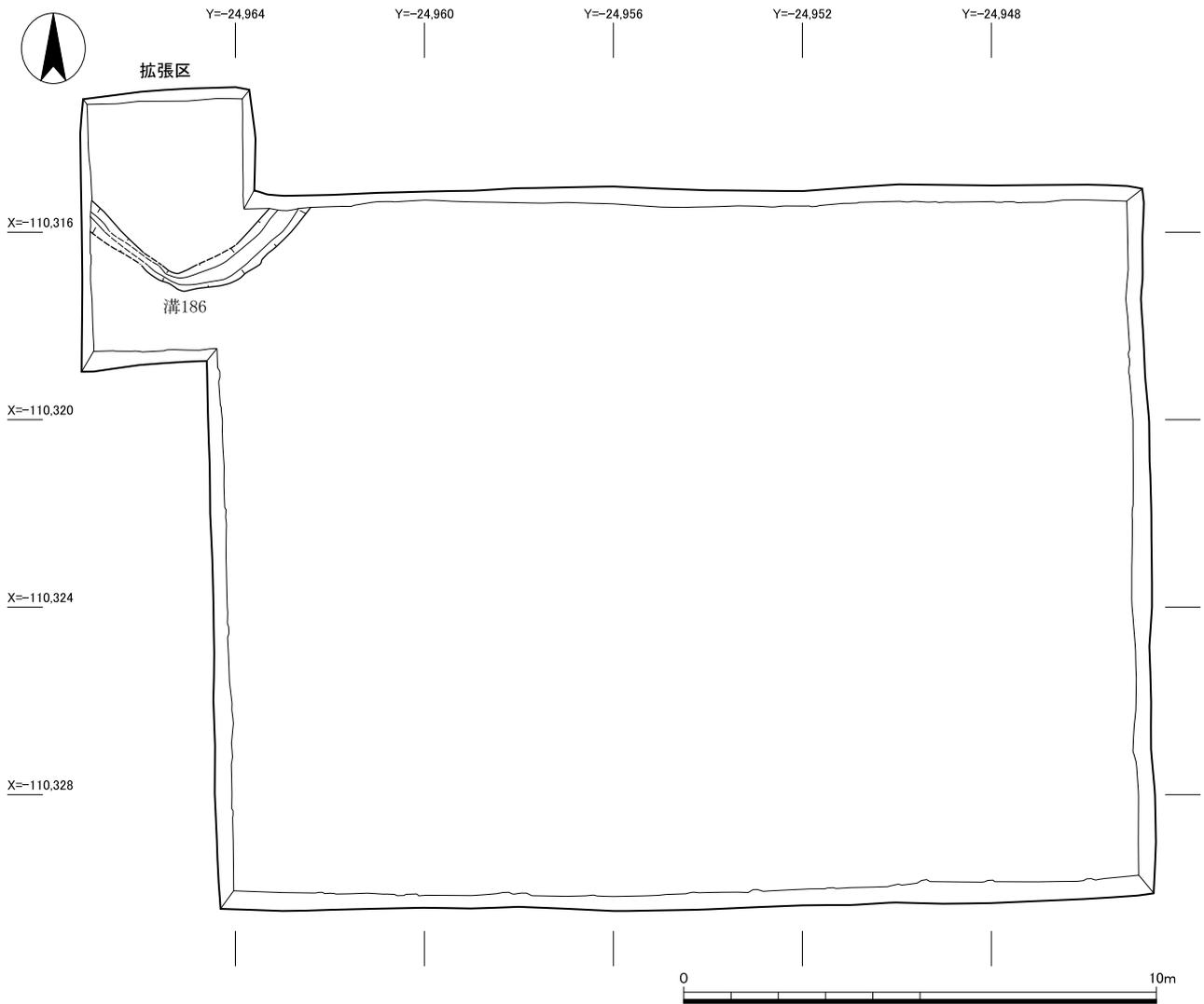


図8 調査区平面図 [古墳時代以前] (1 : 150)

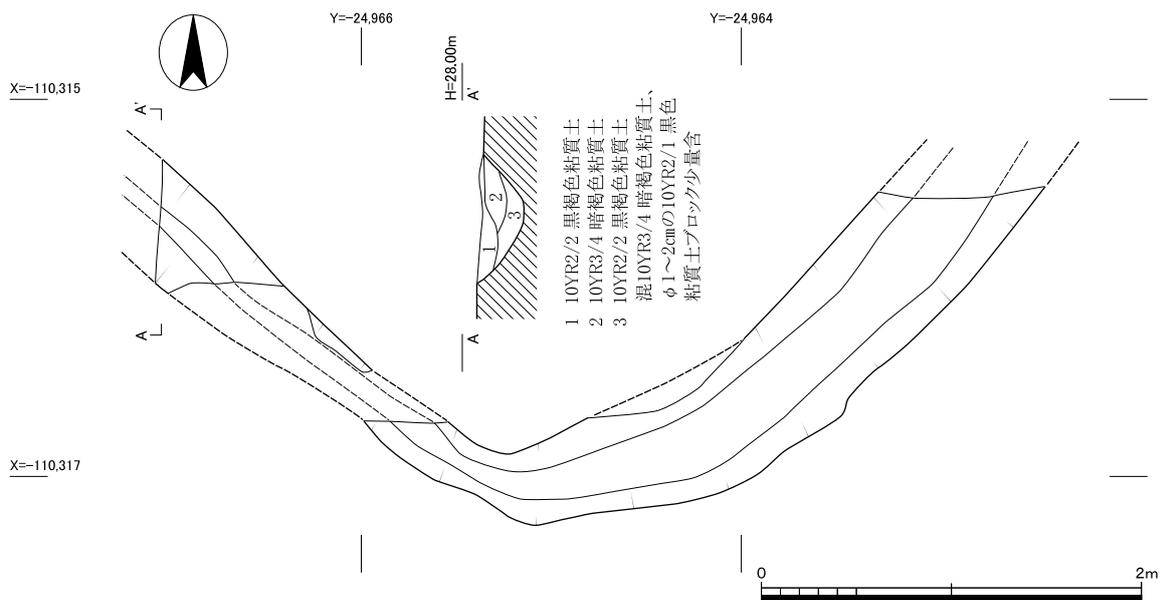


図9 溝186実測図 (1 : 40)

～0.22m、全長5.1m以上である。調査区北壁から南西に約2.5m部分で、緩やかに北西方向にL字に曲がる。検出した部分は隅丸方形を呈する遺構の南角とみられる。遺物は古墳時代以前とみられる土器の細片が出土した。埋土は3層に分層できた。上から黒褐色粘質土、暗褐色粘質土、上層および中層の混土に黒色粘質土ブロックが含まれる土である。底面には高低差が認められる。遺構の形状から自然流路ではなく、人工的な溝と考えられる。

#### (4) 平安時代前期の遺構 (図10、図版1)

建物などに復元できなかった柱穴類も含めると、調査区全域で当該期の遺構を検出している。建物は5棟(建物1～5)検出し、方位はほぼ座標北である。建物は2時期あり、建物1・2が8世紀末から9世紀初頭、建物3～5が9世紀前半に造られたとみられる。建物規模から建物1が建物3、重複関係から建物2が建物4・5に建て替えられた。その他、柵1は建物2、柵2は建物3に伴っていたと考えられる。

**建物1** (図11、図版1・3) 調査区東半で検出した掘立柱建物跡である。2間×3間の南北棟

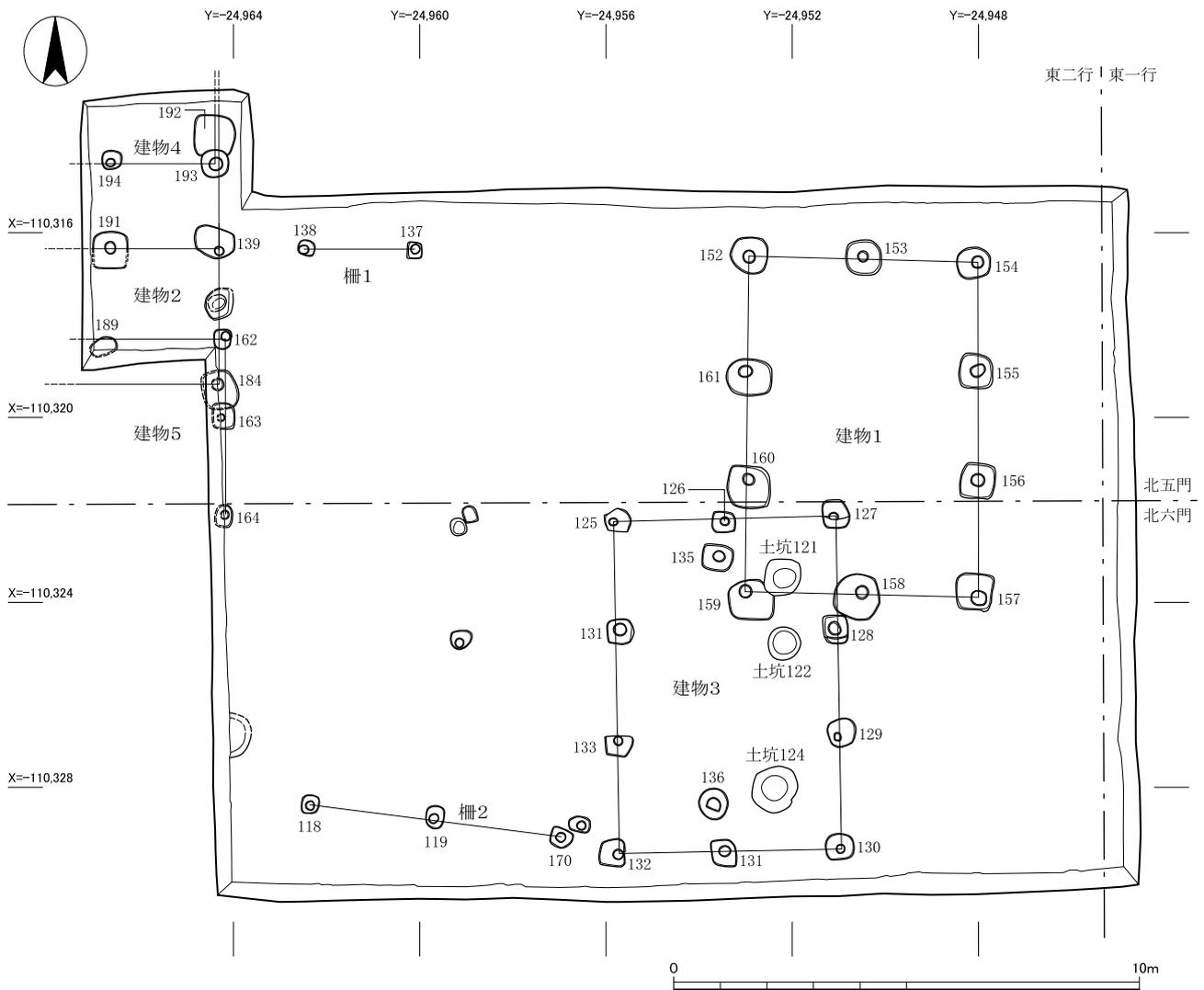


図10 調査区平面図 [平安時代前期] (1 : 150)

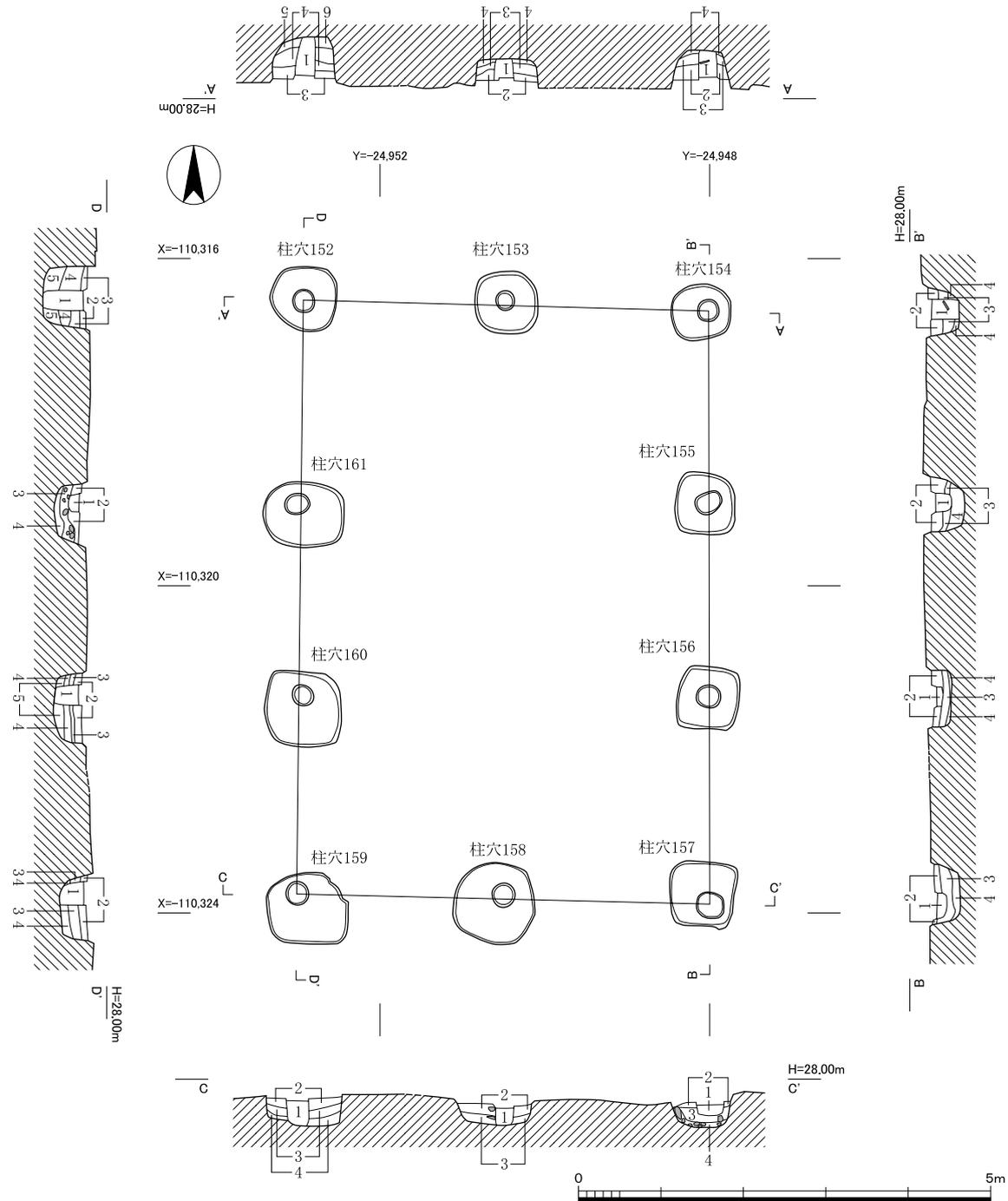


図11-1 建物1実測図 (1:80)

で、柱間は2.4mを測る。柱穴掘形は一辺が0.7~1.0mの隅丸方形を呈するものを中心に、円形から楕円形に近いものがある。検出面からの深さは、北東角の柱穴154が0.45m、北西角の柱穴152が0.6mと深く、その他の柱穴は0.3~0.4mとほぼ同じであった。柱当りの深さを確認したところ、柱によって底まで届いているもの(柱穴152~154・158~160)と、途中で止まっているもの(柱穴155~157・161)の2種類あることが判明した。前者の標高値は27.25~27.42m、後者の標高値は27.50~27.60mである。このことから、柱の長さに合わせて、据える高さを調整したものとみられる。柱当りの直径は22~32cmと幅があるが、実際の柱の直径は20cm程度であろう。埋土は黒褐

**A-A'****【柱穴154】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土(φ2~3cm礫少量含)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~2cmの10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR5/6 黄褐色粘質土
- 4 10YR5/6 黄褐色粘質土混細砂(φ2~3cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土ブロック少量含)

**【柱穴153】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~3cmの10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック、φ1~2cmの礫少量含)
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~1cmの10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック、φ1~2cmの礫少量含)
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR5/6 黄褐色粘質土

**【柱穴152】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 7.5YR5/6 明褐色混細砂礫(φ2~3cm)
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1cmの10YR6/2 にぶい黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 4 10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~3cmの10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 5 10YR6/6 明黄褐色粘質土混10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 6 10YR4/4 褐色粘質土(φ1~2cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土ブロック少量含)

**C-C'****【柱穴159】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~1cmの炭少量含)
- 2 10YR2/1 黒色粘質土混10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(φ1~5cm礫含)
- 3 10YR2/1 黒色粘質土(φ1~3cmの10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック含)
- 4 10YR2/1 黒色粘質土混10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(φ1~10cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量含)

**【柱穴158】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ3~15cmのブロック状、φ3~10cmの礫含)
- 3 2.5Y5/4 黄褐色粘質土混10YR5/2 灰黄褐色粘質土(φ1~3cm礫含)

**B-B'****【柱穴157】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(φ2~10cm礫含)
- 3 10YR7/6 明黄褐色粘質土(φ1~3cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土、φ5~10cm礫少量含)
- 4 2.5Y5/4 黄褐色粘質土(φ3~5cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土少量、φ3~15cm礫含)

**【柱穴156】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR5/6 黄褐色粘質土(φ3~10cmの10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック多量、φ1~3cmの礫微量含)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(φ1~3cmの10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 4 10YR4/4 褐色粘質土(φ1~5cmの10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック少量含)

**【柱穴155】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(いずれもφ10~15cmブロック)
- 3 10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~5cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量含)

**D-D'****【柱穴161】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~2cm礫少量含)
- 2 10YR2/1 黒色粘質土混10YR5/6 黄褐色粘質土(いずれもφ10~20cmのブロック)
- 3 10YR5/6 黄褐色粘質土(φ3~5cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック少量、φ5~12cm礫(意図的に入れられている)含)
- 4 10YR2/1 黒色粘質土混10YR5/6 黄褐色粘質土(いずれもφ10~20cmのブロック)

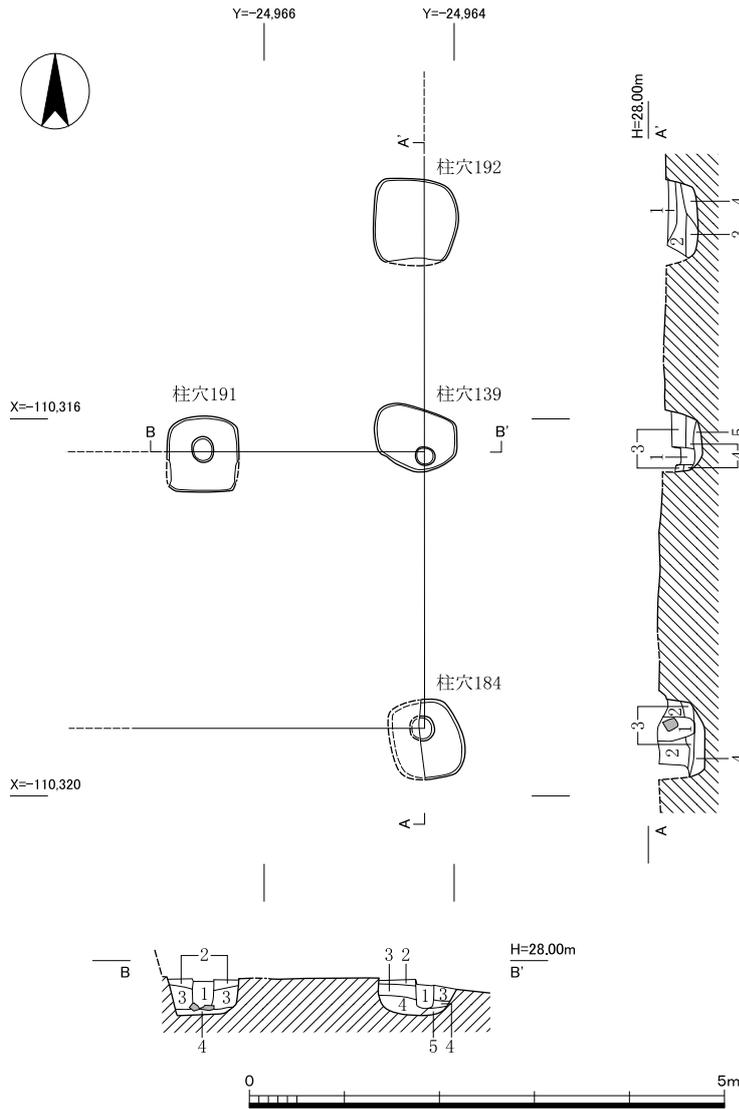
**【柱穴160】**

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~1cmの炭少量含)
- 2 10YR2/1 黒色粘質土混10YR5/6 黄褐色粘質土(いずれもφ10~20cmのブロック)
- 3 10YR5/6 黄褐色粘質土(φ10~15cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック、φ10~12cmの10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 4 10YR2/1 黒色粘質土(φ1~10cmの10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック含)
- 5 10YR2/1 黒色粘質土混10YR5/6 黄褐色粘質土(φ5~10cmのブロック状)

図11-2 建物1実測図土層名

色系と黄褐色系の粘質土が混ざっており、黄褐色系の土は地山相当層の土が混入したものである。この2種の埋土は厚さ0.05~0.1mの互層になっており、版築状に突き固めながら埋めたということがわかる。柱穴154では丸瓦片、柱穴161では10~20cmの礫を柱材の根元近くに差し込んだり、詰めたりした状況を確認した。柱が抜かれた痕跡は確認できなかったが、柱材は残っていなかった。遺物は時期が判然としない小破片が多いが、土師器や瓦が出土している。平安時代前期の8世紀末から9世紀初頭とみられる。

建物2(図12、図版2・3) 調査区北西および拡張区で、4基の柱穴139・191・192・184を検出した。柱穴184は西半分が調査区外である。南北1間以上×東西1間以上の東西棟で、南に庇が付く掘立柱建物跡とみられる。身舎の柱間は2.4m、庇の出は3mを測る。柱穴掘形は一辺0.68~0.9mの隅丸方形を呈し、深さは0.34~0.5mである。柱当りの直径は20cm程度であったが、柱穴192のみ柱当りを検出できなかった。柱穴192の掘形埋土に抜き取りの痕跡は認められなかった。柱当りの底面は標高27.50mにほぼそろっていた。埋土は黒褐色粘質土に地山相当層の黄褐色系粘質土ブロックが混じる土を主体とする。黒褐色系粘質土がブロック状に入った埋土もあり、それらが互層に突き固められていた。柱穴191では柱当り底面南半で10cm程度の礫を4個検出しており、根固め石として入れたとみられる。遺物は土師器および須恵器細片が出土した。平安時代前期の8



A-A'

【柱穴184】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR6/1 褐色粘質土(φ0.5cm以下の10YR6/6 明黄褐色粘質土粒少量含)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~10cmの10YR3/2 黒褐色粘質土・10YR6/1 褐色粘質土ブロック多量含)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(いずれもφ5~8cmのブロック)
- 4 2.5Y3/1 黒褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量含)

【柱穴139】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~1cmの2.5Y6/8 明黄褐色微砂ブロック少量含)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~1cmの10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色粘質土(φ1~5cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック含)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色粘質土(φ10~15cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック多量、φ1cm土師器少量含)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ0.5~1cm炭少量含)

【柱穴192】

- 1 10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ5~10cmの10YR2/1 黒色粘質土・10YR4/1 褐色粘質土ブロック含)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ10~25cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック多量含)
- 3 10YR6/6 明黄褐色粘質土混10YR2/1 黒色粘質土(φ10~20cmのブロック状)
- 4 10YR6/6 明黄褐色粘質土混2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土混10YR2/1 黒色粘質土(φ1~5cmのブロック状)

B-B'

【柱穴191】

- 1 10YR3/3 黒褐色粘質土(φ1cm以下の10YR6/6 明黄褐色粘質土粒少量含)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(φ2~3cmの10YR5/6 明黄褐色粘質土ブロック含)
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(いずれもφ3~10cmのブロック)
- 4 10YR2/2 黒褐色粘質土(φ2~3cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量含)

図12 建物2実測図(1:80)

世紀末から9世紀初頭とみられる。検出した部分は建物南東角にあっており、調査区より西および北へ広がる大型の建物になる可能性がある。

**建物3**(図13、図版2) 調査区南半中央で検出した掘立柱建物跡である。2間×3間の南北棟で、柱間は2.4mを測る。柱穴掘形は一辺が0.48~0.62mで、隅丸方形や隅丸長方形、円形に近い形状のものがある。深さは0.13~0.5mで、底面に高低差が認められる。柱穴126は深さ0.18m、柱穴133は0.13mと特に浅い。この要因として、建物の隅柱ではないことが底面深さに影響しているとみられる。柱当りは掘形の底まで届いているものがほとんどで、唯一柱穴134は底面より約0.05m上で検出した。掘形埋土は灰黄褐色系粘質土にブロック状の地山相当層が混じったものを主体としている。柱当りの径は0.14~0.22mを測る。棟柱には、それぞれ内側に柱穴が伴っている。柱穴135は南北0.6m、東西0.68m、深さ0.12mである。柱穴126から南へ0.75m、西へ0.12mの位置にある。埋土は黒褐色や灰黄褐色粘質土に明黄褐色粘質土ブロックが少量混じる。柱穴136は直径0.62~0.68mの円形を呈し、深さ0.2mである。柱穴131から北へ1.02m、西へ0.24mにある。埋土は地

山相当層に近いにぶい黄褐色粘質土である。建物内の仕切りまたは棟持ち柱、作業台の脚などが想定できる。また、建物内の東半で南北方向に並ぶ土坑121・122・124を検出した。東柱列と中央柱列との中間に位置していることなどから、建物3に伴うと考えられる。この建物3は、建物1の柱穴と直接的な切り合い関係は確認できなかった。しかし、建物3内の土坑121が建物1の柱穴に切り勝っていたこと、建物1の柱穴よりも小ぶりであることから、建物1より新しいと判断した。また、建物1の南西に重なり、同規模であることから、建て替えの可能性はある。遺物は土師器、須恵器、瓦の細片が出土している。時期は平安時代前期の9世紀前半代に収まるとみられる。

**建物4**（図14、図版2） 拡張区北で検出した2基の柱穴193・194である。柱穴193が建物2の柱穴192に切り勝っている。柱穴193が建物2・5の東柱筋に並ぶことから、建物の南東角と想定され、北および西へ展開する掘立柱建物跡になるとみられる。柱間は2.4m、柱穴掘形は柱穴193が一辺0.6m、柱穴194が一辺0.42mで、いずれも隅丸方形を呈する。深さは0.16～0.2mで、柱当りの直径は0.18～0.26mを測る。掘形埋土は暗褐色粘質土にブロック状の黒褐色や黄褐色粘質土が混じる。建物2の建て替えとみられる。出土遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器がある。時期は平安時代前期の9世紀前半とみられる。

**建物5**（図15、図版2・3） 調査区西端および拡張区南端で、柱穴162～164・189の4基を検出した。柱穴162以外は西半分または南半分が調査区外になっている。柱穴162を北東角、柱穴164を南東角とした南北2間×東西1間以上の東西棟とみられる。北端の柱穴162と柱穴163の柱間が1.8m、柱穴163と南端の柱穴164の柱間が2.1mであることから、南または北に庇が付く建物と考えられる。柱穴掘形は一辺が0.38～0.5mで、隅丸方形を呈する。深さは柱穴189が0.04mと非常に浅く、その他は0.18～0.32mを測る。柱材の径は推定15cmであるが、柱穴189では柱当りは確認できなかった。掘形埋土は黒褐色粘質土などに地山相当層の明黄褐色粘質土ブロックが混じり、柱穴164は下層に5～6cmの礫を投入している。建物2の柱穴184南半を壊して造られていた。建物4と共に、建物2の代わりに建てられたとみられる。遺物は土師器、須恵器の細片が出土した。平安時代前期の9世紀前半とみられる。

**柵1**（図16、図版3） 調査区北西で検出した。柱穴137・138が柱間2.4mで東西に並ぶ。柱穴掘形は一辺0.32～0.36m、深さ0.13～0.19mである。柱当りの埋土は黒褐色粘質土で、掘形の埋土は黒褐色や灰黄褐色粘質土に地山相当層の明黄褐色粘質土ブロックなどが混じる土である。柱当りから柱材は直径18cm前後と推定される。1間分のみであることから、目隠し塀のような簡易な構造物であろう。また、建物2の身舎南柱列上に位置していることから、建物関連の柱穴の可能性もある。土師器、須恵器、灰釉陶器の各破片が出土した。平安時代前期とみられる。

**柵2**（図16、図版3） 調査区南西で検出した柱穴118・119・170である。柱間2.7mで、2間分確認したが、調査区の西へ延びている可能性がある。柱穴の掘形は一辺0.38～0.5m、深さ0.12～0.18m、埋土は黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質土、黄褐色粘質土に暗褐色粘質土などのブロックが混じる土であり、柱当りの径は約0.18mを測る。方位は北で東へ8度振れており、他の建物などとは振れを異にする。遺物は柱穴118から土師器、須恵器が出土した。平安時代前期とみられる。

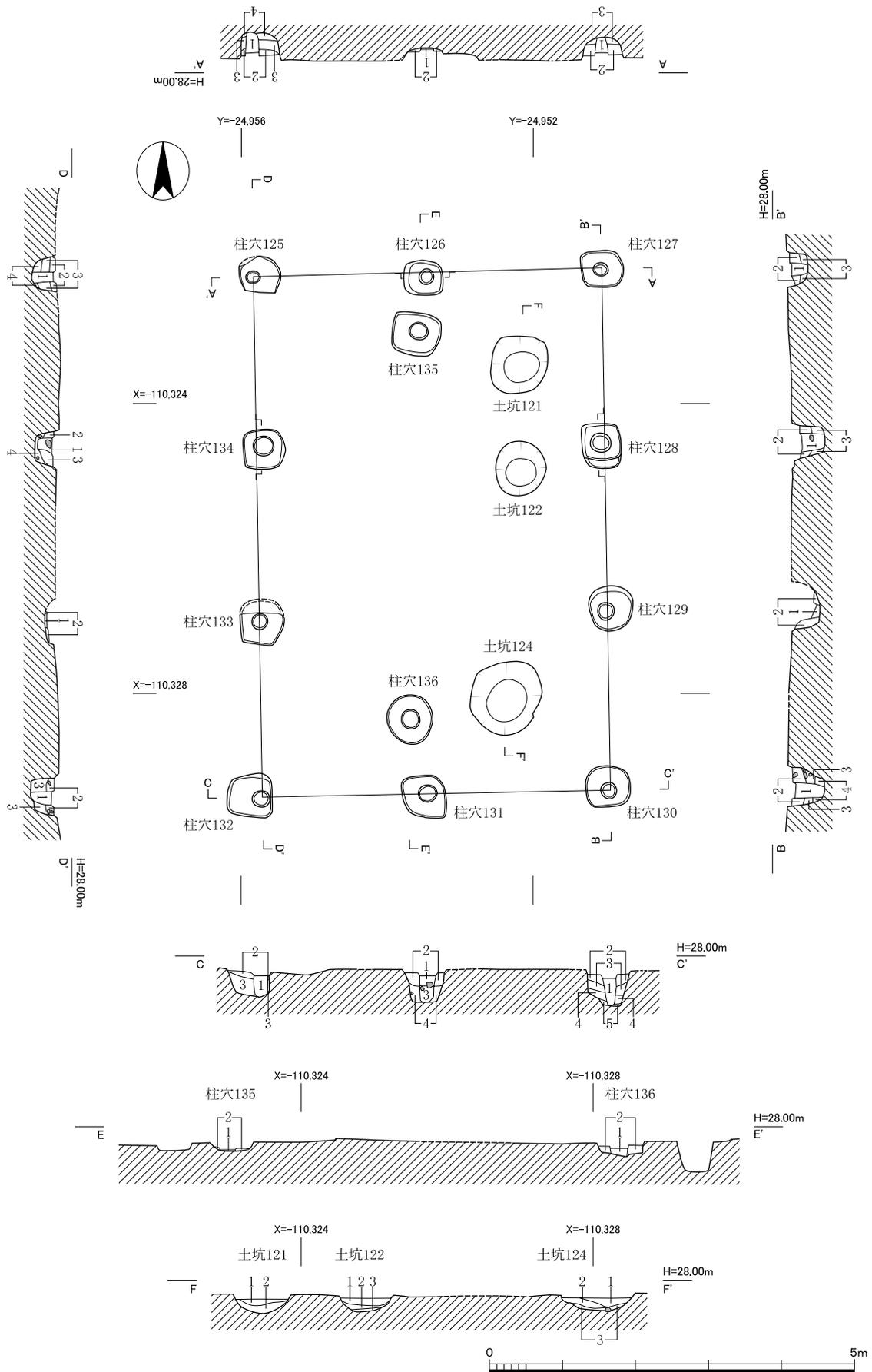


图13-1 建物3、土坑121·122·124实测图(1:80)

A-A'

【柱穴127】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5cm炭・土師器少量含)
- 2 10YR5/6 黄褐色粘質土(φ1~5cmの10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック、φ2~10cm礫含)
- 3 10YR4/4 褐色粘土混(φ1~2cmの10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック少量、φ5~10cm礫少量含)

【柱穴126】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~5cm礫少量含)

【柱穴125】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~4cm炭含)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質土(長さ0.5~2cmの10YR2/1 黒色粘質土、10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量、φ0.5~2cm礫、φ0.5~1cm炭少量含)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土

B-B'

【柱穴130】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~2cm炭・土師器・礫少量含)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~10cm礫含)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土(φ5~10cm礫、φ0.5~1cm炭・2.5Y6/8 明黄褐色粘質土ブロック少量混)
- 4 10YR4/4 褐色粘質土(φ0.5~1cm炭・土師器少量含)
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(φ5~10cm礫含)

【柱穴129】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~1cm炭少量含)
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量、φ3~10cm礫含)

【柱穴128】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混2.5Y6/6 明黄褐色粘質土(φ1~2cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック少量、φ2~6cm礫含)
- 3 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土(φ2~10cmの10YR4/2 灰黄褐色粘質土ブロック含)

C-C'

【柱穴132】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質土(φ2~8cm礫含)
- 3 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土(φ0.5~1cm礫少量含)

【柱穴131】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ0.5~4cm礫少量含)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(φ2~5cmの7.5Y4/1 灰色シルト、10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック含)
- 3 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土混礫(φ5~6cm)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック、φ3~5cm礫含)

D-D'

【柱穴134】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック、φ1cm礫少量含)
- 2 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色粘質土(φ1~2cmの10YR2/1 黒色粘質土ブロック、φ0.5~1cm炭・土師器少量含)
- 3 2.5YR4/6 オリーブ褐色粘質土(φ1~2cmの10YR3/2 黒褐色粘質土ブロック少量含)
- 4 10YR4/2 暗灰褐色粘質土(φ0.5cm炭・土師器、φ0.5~6cm礫少量含)

【柱穴133】

- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(φ1~2cmの10YR2/2 黒褐色粘質土、10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック、φ1~3cm礫少量含)

E-E'

【柱穴135】

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量含)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~5cm礫少量含)

【柱穴136】

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土混2.5Y5/4 黄褐色粘質土(φ1~2cm礫少量含)
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(φ1~5cm礫少量含)

F-F'

【土坑121】

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土(φ1~8cmの10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック、φ1~2cm礫少量含)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック、φ1~3cm礫、φ1~3cm炭、φ0.5~1cm土師器少量含)

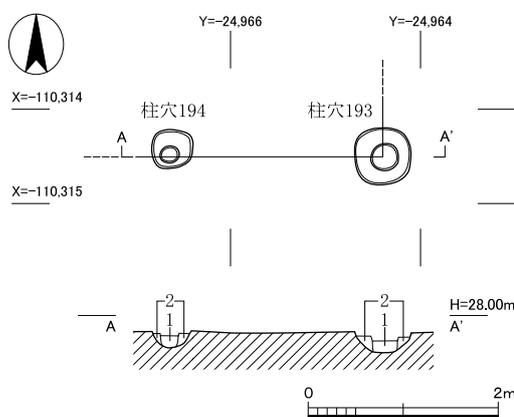
【土坑122】

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土(φ1~5cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土・10YR5/1 灰黄褐色粘質土ブロック多量含)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘質土(φ1~2cmの10YR3/2 黒褐色粘質土ブロック多量含)
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土混10YR6/2 灰黄褐色粘質土

【土坑124】

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土混10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土(φ1~3cmの7.5YR2/2 黒褐色粘質土ブロック、φ0.5~1cm炭・土師器少量含)
- 2 7.5YR2/2 黒褐色粘質土混10YR5/2 灰黄褐色粘質土(φ1~5cm礫少量含)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土(φ2~3cmの10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック含)

図13-2 建物3、土坑121・122・124実測図土層名



【柱穴194】

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(φ1cm以下礫・土師器極少量含)
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック多量、φ1~6cmの10YR2/1 黒褐色粘質土ブロック、φ1~2cm礫・土師器少量含)

【柱穴193】

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(φ1~3cm礫・φ0.5~1cm土師器少量含)
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質土(φ1~2cmの10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック少量、φ1~2cmの10YR2/1 黒褐色粘質土ブロック、φ1~2cm礫・φ1cm以下炭少量含)

図14 建物4実測図(1:80)

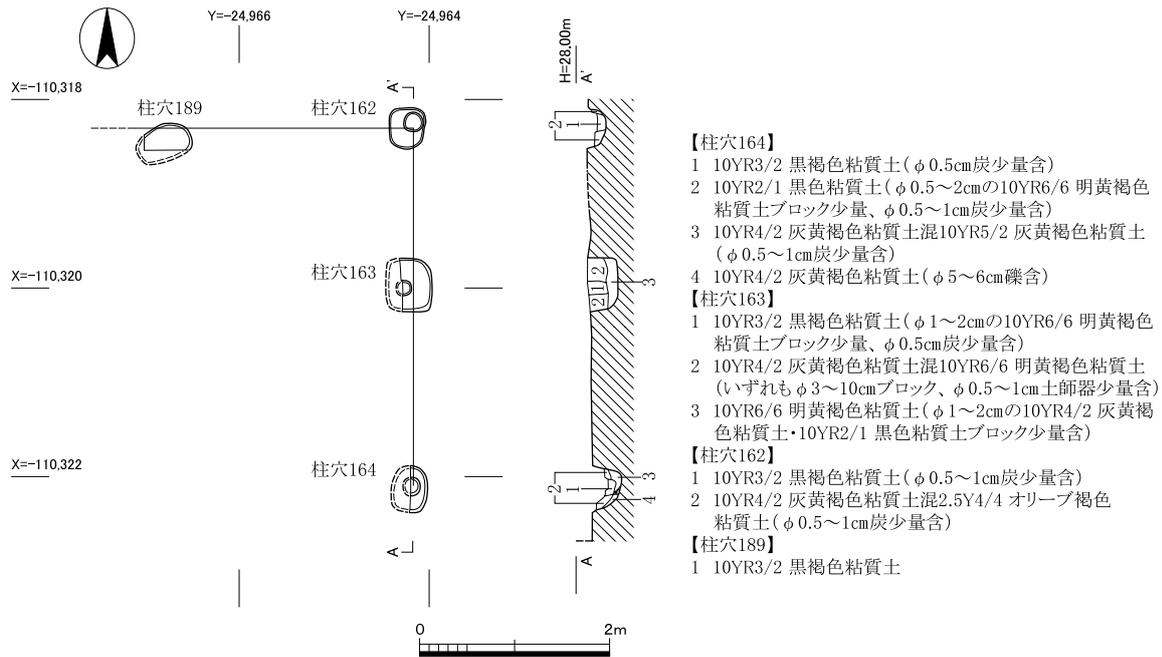


図15 建物5実測図 (1 : 80)

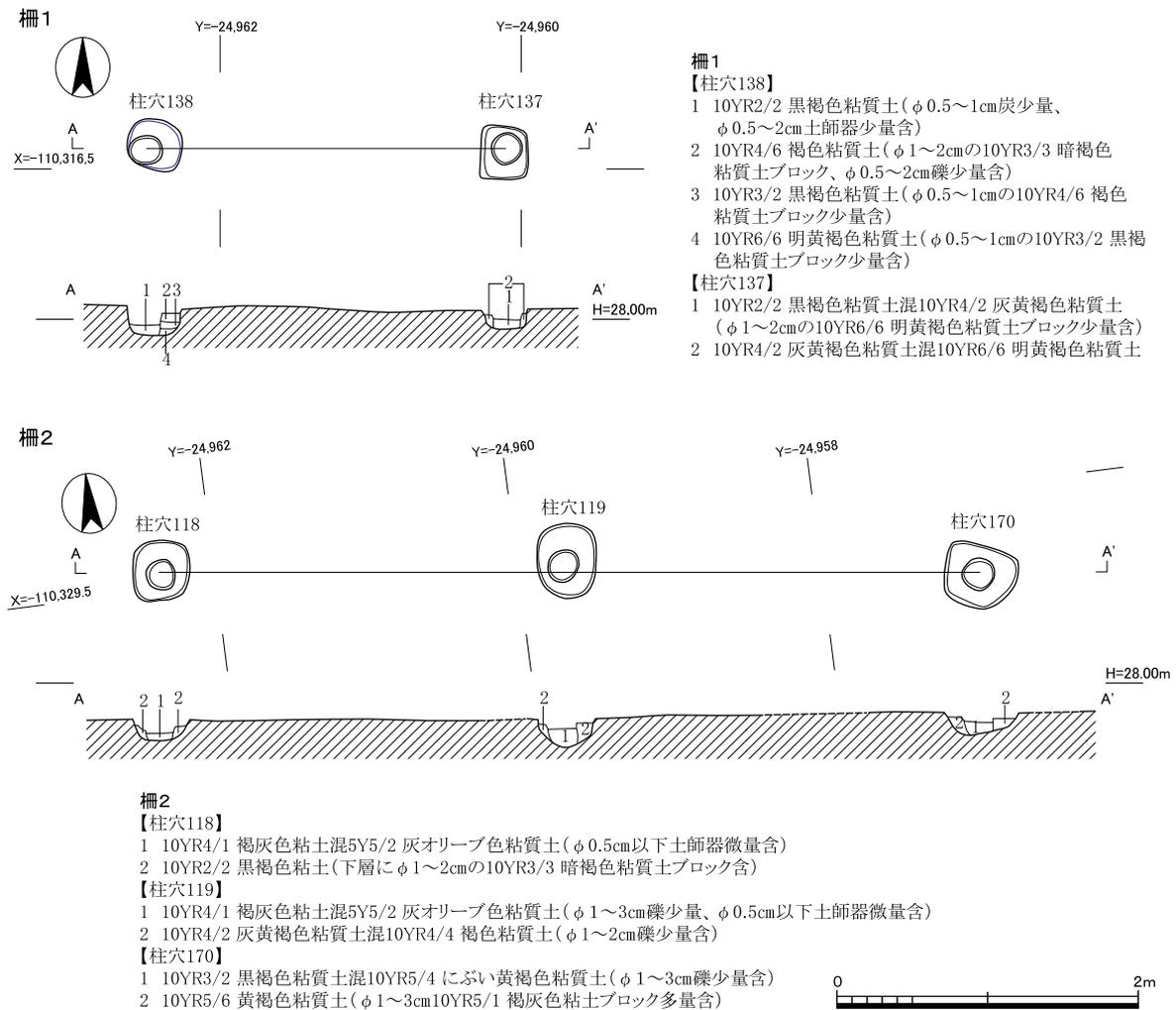


図16 柵1・柵2実測図 (1 : 50)

土坑121・122・124（図13、図版2・3） 調査区中央南の建物3内東半で検出した。南北方向に1列に並ぶ。各中心間の距離は土坑121・122間が1.5m、土坑122・124間が3mである。後世の溝100に壊されているが、土坑122・124間にもう1基土坑があった可能性がある。いずれもほぼ円形であり、直径は北の土坑121から順番に0.69m、0.8m、1mとなる。深さは0.22～0.25mで、底面標高値はほぼ27.60m前後で、形態は挿鉢状である。埋土は暗褐色粘質土や黒褐色粘質土に黄褐色系粘質土ブロックが混じるものが多い。出土した遺物は土師器、須恵器の破片である。建物3に伴った遺構であり、平安時代前期の9世紀前半とみられる。須恵器甕の破片は出土していないが、遺構の形状などから甕を据え付けた穴とみられる。

### (5) 平安時代中期以降の遺構（図17）

平安時代中期から鎌倉時代頃の遺構には、調査区西端で検出した東西方向の溝および北西から南東方向の溝がある。時期の明らかな遺物が出土していないことから詳細は不明であるが、層序からこの時期と判断した。



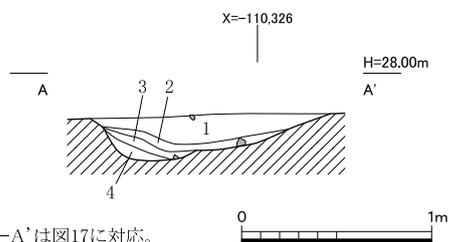
図17 調査区平面図 [平安時代中期以降] (1 : 150)



図18 溝100全景（東から）



図19 溝100断面（東から）



※ A-A'は図17に対応。

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1~10cm礫、φ1~3cm・土師器含）
- 2 10YR3/3 黒褐色粘質土（φ1~2cm炭・土師器少量含）
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土混5Y3/2 オリーブ黒色粘質土（φ2~5cm礫多量含）

図20 溝100断面図（1：40）

中世以降の遺構には、調査区全面で検出した耕作溝、柱穴、杭跡がある。耕作溝は東西方向のものが新しく、幅0.2~0.4m、深さ0.1m前後のものが中心で、埋土は6種類に分類できた。柱穴は掘形の直径約0.2mが主流、杭跡は直径0.1m前後で、多くは不規則に配置されているため、どのような機能を果たしていたのかは不明である。耕作溝と柱穴の大半は中世であり、杭跡で直径10cm程度の材が残存しているものについては江戸時代以降のものである。

以下、出土遺物を掲載した遺構の概要を述べる。

**溝40** 調査区北西で検出した南北方向の耕作溝である。幅0.25~0.3m、検出した長さ約12m、深さ0.05~0.1mである。埋土は暗褐色粘質土混黒褐色粘質土で、調査区西壁第15層の耕作溝埋土に相当する。14世紀から16世紀中頃の遺物（土師器、瓦質土器）を包含する。

**溝100**（図18~20） 調査区南半で検出した。東西方向の溝で、幅1~1.5m、長さ19m以上、深さ0.16~0.32mである。北側が部分的に2段になっており、南に向かって深くなる。底面の勾配は東が高く、西が低い。埋土は黒褐色粘質土、暗オリーブ褐色粘質土などで、最下層の4層は径2~5cmの礫が多く含まれる。ただし、礫の包含は、地山相当層に礫が混じらない調査区中央より西半では確認していない。中世の耕土直下に検出面があり、締まりのない中世耕土（図6の第11層）とは異なった埋土を持つ。平安時代前期の遺物を多量に包含するが、9世紀後半や10世紀初頭の遺物を少量含んでおり、最も新しい遺物は13世紀中頃の須恵器鉢である。遺構の成立時期は不明であるが、13世紀中頃から14世紀までの間に埋没したとみられる。

**柱穴73** 調査区中央南端で検出した。直径0.24mの柱穴で、深さ0.23m、埋土は暗オリーブ粘質土である。遺物は15世紀中頃の土師器皿が出土した。

## 5. 遺 物

### (1) 遺物の概要 (表3)

遺物は整理箱に10箱出土したが、瓦類や鉄製品などは極少量であり、土器類が大半であった。古墳時代以前の土器片は、溝186から出土したものの、磨滅が著しく特定が難しい。その他には平安時代より古い時期の土器は確認していない。

平安時代前期の柱穴から出土した遺物は、小片が多く、図化がほとんどできなかった。溝100や中世耕作溝から出土した遺物は、当該期のものよりも平安時代の遺物はその中心を占め、特に平安時代前期の遺物に偏る。細片ではあるが、磨滅していないものが多い。9世紀後半や10世紀代の遺物も少量混じっていた。また、中世耕作土に含まれた遺物は、須恵器や焼締陶器も少量含まれるが、土師器の小片が多く、時期の判明するものはほとんどない。杭跡からは江戸時代の遺物が出土した。

### (2) 土器類 (図21・22、図版4)

**平安時代前期の土器** (図21、図版4) 1・2は土師器碗である。内面はナデ調整、外面は全面をヘラケズリ調整する。1は復元口径12.6cm、残存高2.2cm、内外面は橙色を呈し、胎土は2mm以下の石英などの砂粒を含むが精良である。柵1柱穴138から出土した。2は復元口径14.4cm、残存高2.4cm、内面は浅黄橙色、外面は橙色、胎土は1mm以下の赤色粒などを少量含む。建物3柱穴136から出土した。

3・4は土師器皿である。内面はナデ調整、外面はヘラケズリ調整を施す。3は復元口径14.4cm、

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代以前	土器				
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、輸入磁器、瓦		土師器6点、須恵器3点、緑釉陶器1点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、輸入磁器、瓦質土器、焼締陶器など		須恵器1点		
室町時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器など		土師器3点		
江戸時代	施釉陶器、肥前磁器など				
合 計		11箱	14点 (1箱)	0箱	10箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

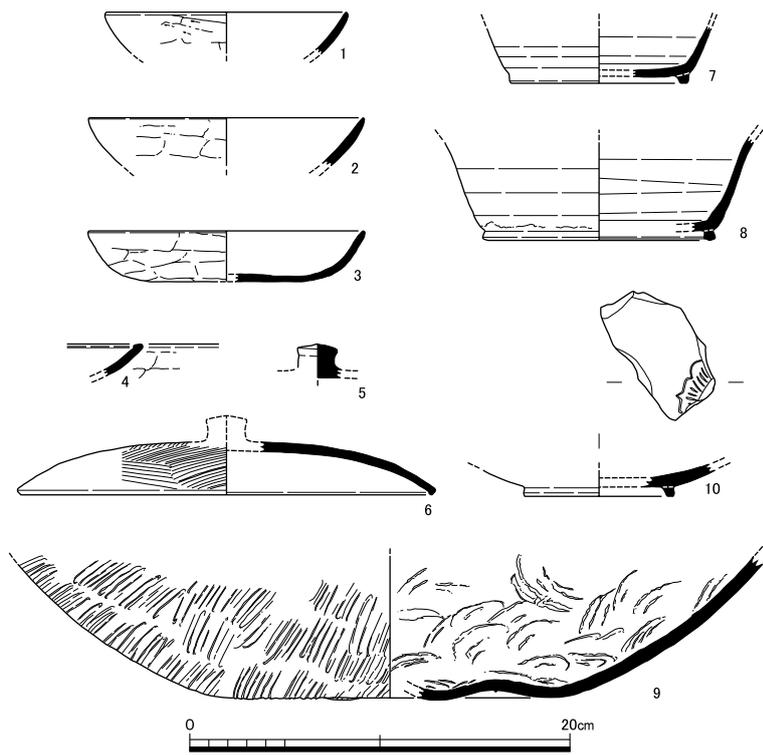


図21 平安時代前期の土器実測図（1：4）

6は土師器蓋であるが、つまみ部分は欠損している。内面は丁寧にナデ調整し、外面は縦横にヘラミガキ調整を行う。口縁端部を内面に摘み出す。外面には口縁部に並行するように、粘土紐接合痕による約1.5cm幅の浅い溝または凹凸がある。この一部はヘラミガキ調整以前に行われたナデまたはケズリの際の工具痕と重なっていた。復元口径21.5cm、残存高2.8cm、内外面はにぶい黄橙色を呈し、胎土は1mm以下の長石や雲母を含む精良なものである。建物3柱穴134から出土した。

7・8は須恵器杯である。いずれも内外面は回転ナデで、高台は貼り付けである。7は復元底径9.2cm、残存高3.0cm、内外面は灰白色、胎土には1mm以下の石英などを微量含む。建物3柱穴136出土である。8は復元底径11.8cm、残存高5.5cm、内外面は灰白色、胎土には1mm以下のチャートを微量含む。口縁部付近が外反する。高台接地面の中心側を段状に削る。建物3柱穴129から出土した。

9は須恵器甕の底部片である。底面の一部が弧状に窪み、半円形の剥離片が熔着している。焼き台痕の可能性はある。内面は同心円文、外面は平行のタタキを施す。復元底径は17.8cm、残存高は7.5cm、器厚は0.5cm前後である。色調は灰色、胎土には径10mmのチャートが1個入るが、その他は径1mm以下のチャート・長石が少量含まれる。建物4柱穴193の北側底付近で出土した。

10は緑釉陶器皿である。内外面にヘラミガキ調整を施した後、高台を貼り付け、全面に緑釉を塗布する。内面に陰刻花文を線描きしている。素地は白色を呈し、胎土には砂粒は含まず、底径7.8cm、残存高1.7cmである。中世の溝100中央付近から出土した。

各遺物の時期は、1～4・10は平安京I期中～新段階、5～8は平安京I期中段階、9は平安時代前期である。

器高2.7cm、内面はにぶい橙色、外面は橙色、胎土は精良で、1mm以下の赤色粒を多く含む。土坑121から出土した。4は残存高2.3cm、内面は浅黄橙色、外面は橙色、胎土は2mm以下の石英や雲母などを少量含む。口縁端部を内面に引き出す。建物4柱穴194から出土した。

5は建物3柱穴125から出土した土師器蓋のつまみ部分である。内外面にナデ調整を施している。最大径2.1cm、残存高1.8cm、内面はにぶい黄褐色、外面は浅黄橙色、胎土は1mm以下の石英やチャートを少量含む。

中世の土器（図22、図版4） 11～13は土師器皿である。11は復元口径6.8cm、器高1.6cm、底径3.4cm、内外面は灰白色、2mm以下の長石などを含む精良な胎土である。内面から外面上半部までを丁寧にナデ調整し、外面下部をおさえ、底面中央を窪ませる「へそ皿」である。柱穴73から出土した。12は復元口径11.2cm、残存高2.0cmである。口縁外面を強くなでるため、口縁端部がわずかに外反する。内面はナデ、外面下部はオサエである。内面下部は灰白色、内面上部から外面にかけてはにぶい橙色である。胎土には1～3mmのチャートや長石を含む。調査区南壁第9層の中世耕作土から出土した。13は復元口径14.3cm、残存高2.2cm、色調は浅黄橙色、胎土には1mm以下の長石や4mm以下のチャートを少量含む。口縁端部をわずかに摘み上げる。内面から外面上部までを横方向になで、外面下部にオサエを施す。溝40から出土した。

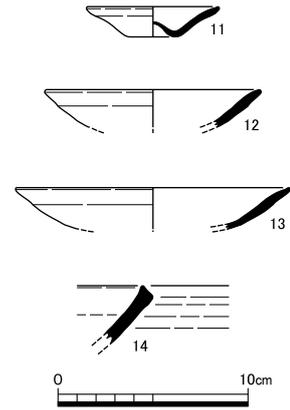


図22 中世の土器実測図  
（1：4）

14は須恵器鉢である。残存高3.2cmの口縁部片で、口縁端部を摘み上げ、断面三角形に整える。内外面は回転ナデである。内面は灰白色、外面は灰色、胎土には2mm以下の石英や長石を含む。全体に磨滅している。溝100西半から出土した。

時期は11が京都Ⅷ期古段階、12が京都Ⅹ期中～新段階、13が京都Ⅹ期古段階、14が13世紀中頃（鎌倉時代）である。

## 6. まとめ (図23)

今回の調査では、平安時代前期の掘立柱建物跡が良好に残存していることを確認した。また、調査区西端および拡張区でも建物跡を検出し、調査区外に遺構が展開していくことを確認した。建物跡は全部で5棟あり、遺構の重複関係から、調査地は少なくとも2時期にわたって宅地として使用されていたことがわかった。調査区の位置は、平安京右京四条三坊十一町の東二行北五門および同北六門の境がほぼ調査区の南北の中心に当たり、東端に東一行との境界が入る。建物2・4・5は、この調査区が位置する十一町の中心に近いところで検出している。この内、建物2は南側に庇が付くことから、主殿格の大型建物の可能性がある。これらの建物配置から十一町は、1町規模の邸宅跡であった可能性を指摘できる。

平安時代前期の建物跡の変遷については、建物1・2が8世紀末～9世紀初頭、建物3～5が9世紀前半に造られたと考えられる。建物1から建物3、建物2から建物4・5へと建て替えられたとみられる。その他の遺構では、柵1は建物2の南柱列が直線上に並ぶことから、これと同時期と考えている。また、柵2については埋土の類似性から、近接しているが建物3に伴うとみられる。

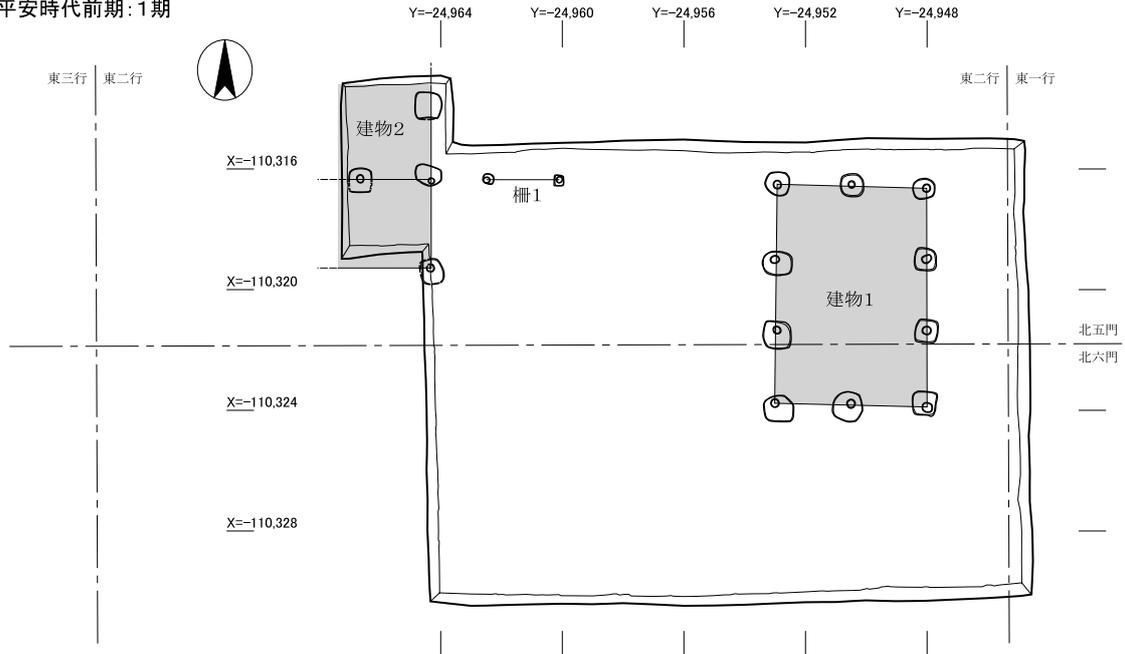
建物1を建て替えたものとみられる建物3は、播鉢状の底面を持つ土坑（土坑121・122・124）が建物内部の東半に並び、梁行の内側ほぼ中央に一对の柱穴（柱穴135・136）を持つ特殊な建物である。それらの柱穴については、特異な屋根構造を支えた棟持ち柱、建物内を東西に仕切る堀の柱、床張りが必要な作業台の脚部の柱などの機能が考えられる。土坑については甕を据えた痕跡とみられ、総合すると貯蔵用の倉庫あるいは酒などを造るための作業用建物と想定できる。甕を内部に備えた建物跡は、平安京跡だけでなく長岡京跡でも確認されているが、今回検出した建物3のような内側に用途の不明な柱穴を持つ遺構例は検出されておらず、今後の類例発見に期待したい。

中世の耕作溝から平安時代の遺物が少なからず出土したことや、柱穴掘形の深さが浅いことから、平安時代前期の遺構面が、平安時代中期以降にかなり削平されたと考えられる。削平の理由を基本層序から想定すると、古い時期の土層上面が平らであり、その後に営まれた耕作土も調査区全面にわたって平坦にならされていることから、耕地化に関連した造成があったと考えられる。

平安時代中期から鎌倉時代の遺物がほとんど確認できないことから、宅地としての利用は平安時代前期までであったとみられる。それ以降は、耕作地に転化し『拾芥抄』にあるように荘園となったとみられる。確実に耕作地化した時期は、耕作溝の出土土器から14世紀中頃以降である。調査区南西には、平安時代中期から鎌倉時代の湿地状堆積直下に、中世以降の耕作溝と同じ形状である数条の溝を検出しており、平安時代中期以前の耕地化も考えられるが、明確な遺物が出土していないため推測に留まる。平安京右京域が耕地化していった時期については今後の課題であり、明確な遺構が検出されることを今後の調査に期待したい。

耕地化に関連して、東西方向の溝100は幅1～1.5mあるしっかりした溝である。溝の中心は、東一行北五・六門の境界から南へ約5mのところを位置している。これは一戸主を南北に三等分した長さと同じである。このことから、区画溝または用水路であった可能性がある。

平安時代前期:1期



平安時代前期:2期

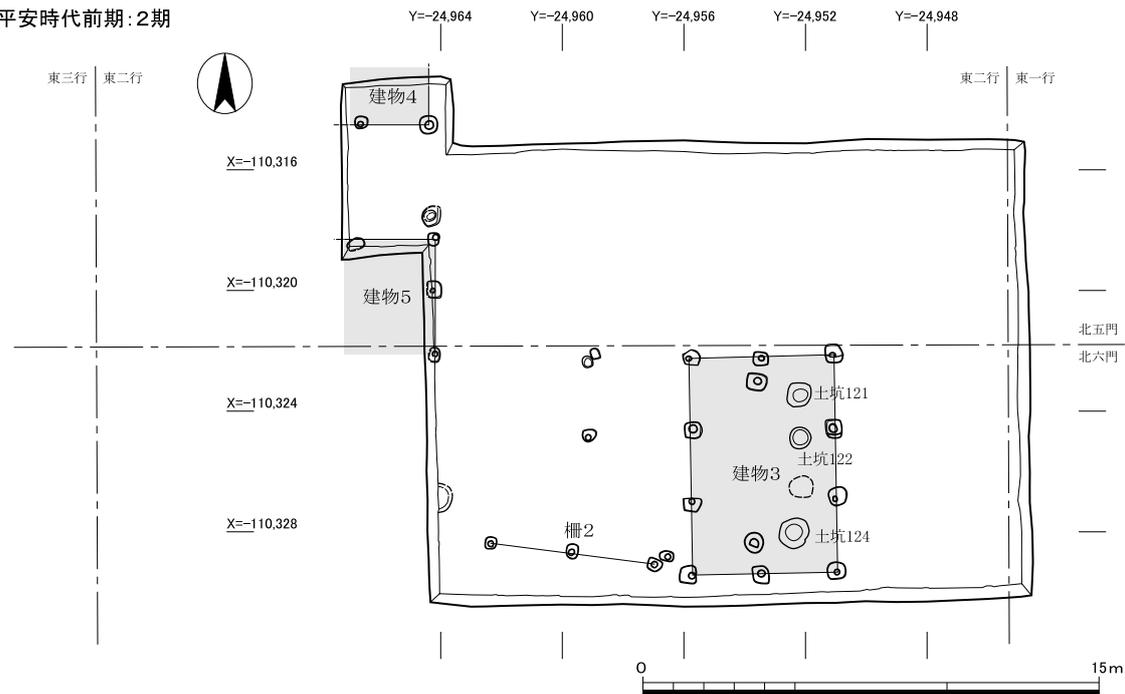


図23 平安時代前期の遺構変遷図 (1 : 250)

その他に、溝186は、古墳時代以前の土器とみられる遺物を包含し、埋土も明らかに平安時代より古く、遺構の形状もL字に屈曲していることから、人工的に掘削された溝であろう。調査区北西角で検出したため、どのように広がっていくのかわからないが、すぐ北側の調査地(図5・表1-46地点)で古墳時代の溝が確認されていることから、集落に関連した溝などの可能性を考えることができる。弥生時代から古墳時代の遺物散布地である西ノ京遺跡や、弥生時代の集落遺跡である山ノ内遺跡が近接して存在し、それらの遺跡に関連する遺構とみられる。



# 圖 版





1 平安時代前期全景（西から）



2 建物1全景（北から）



1 建物3、土坑121・122・124全景（北から）



2 建物5全景（北東から）



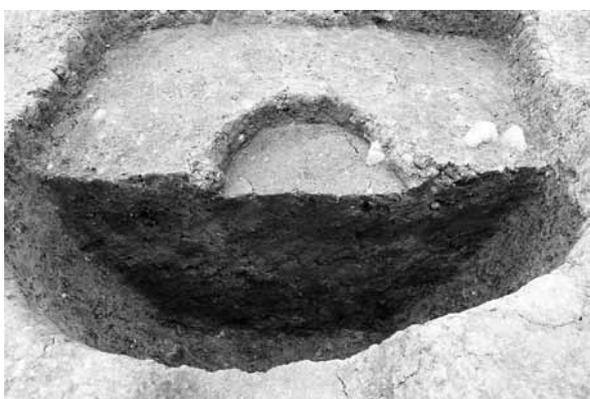
3 拡張区建物2・4全景（北から）



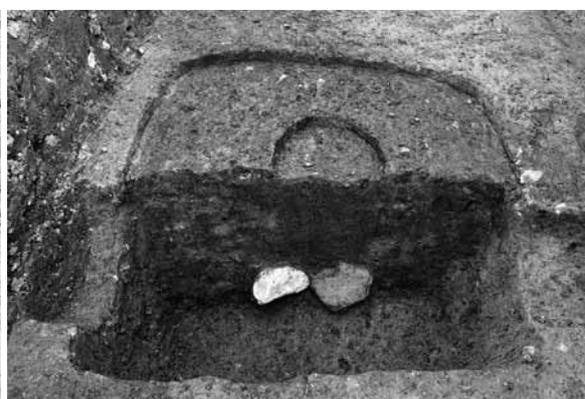
1 柵1全景（西から）



2 柵2全景（西から）



3 建物1柱穴155断面（東から）



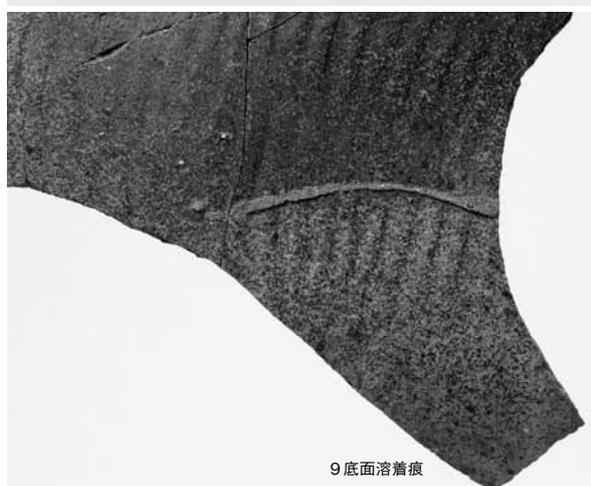
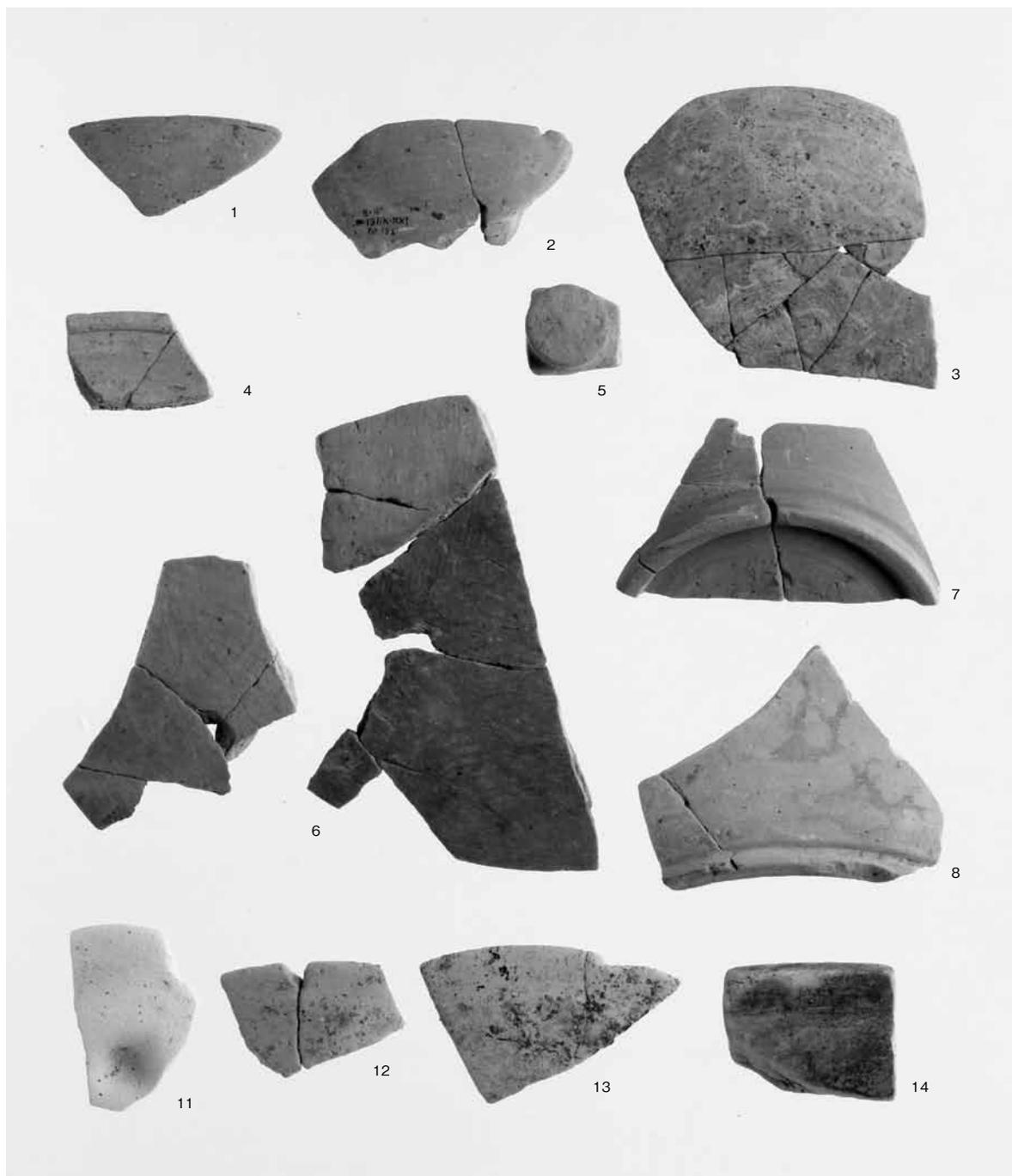
4 建物2柱穴191断面（南から）



5 建物5柱穴163・建物2柱穴184断面（東から）



6 土坑121断面（西から）



9底面溶着痕



10

平安時代から室町時代の土器

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうしじょうさんぼうじゅういっちょうあと							
書名	平安京右京四条三坊十一町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-1							
編著者名	近藤奈央							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年8月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう 平安京跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 さいいんしゅんえいちょう 西院春栄町  41-3、41-7  の一部	26100	1	35度 00分 98秒	135度 43分 35秒	2013年4月 9日～2013 年5月10日	316㎡	住宅付 工場建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	古墳時代以前	溝	土器		平安時代前期の建物跡・柵・土坑などを検出。この時期の遺構が2時期にわたって営まれていたことが判明。		
		平安時代前期	建物跡、柵、土坑、柱穴	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦など				
		平安時代中期～室町時代	溝、柱穴、杭跡	土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、鉄製品など				
		江戸時代以降	杭跡	施釉陶器、肥前磁器など				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-1  
平安京右京四條三坊十一町跡

発行日 2013年8月30日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961